

# 完全生命体、幻想郷を 彷徨う

KYマッシュ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ありとあらゆる生命が集う世界、幻想郷。そんな世界に入り込んでしまった1つの影。それはかつて完全生命体と呼ばれ、人類を恐怖に陥れたデストロイアであった。

その先に待つのは『平穏』か、或いは『宿命』か…

【今こそ覚醒し、破壊せよ】

※この作品はゴジラシリーズに登場する怪獣が幻想郷を彷徨い、何を知り何を得るのか…そんなストーリーを描く…予定です。

デストロイアが分からない方は、こちらを参照下さい。

〔2017年〕

4／16 タグ追加〔仮面ライダー〕

8／17 外伝としてシン・ゴジラ編を追加しました

〔2018年〕

6／6 一部あらすじを変更しました

6／8 一部サブタイトルを変更しました

12／6 タグを調節しました

# 目次

## 第1章【地に降り立つ獣】

降臨 | 1

新たなる旅路 | 6

放浪の先で | 13

妖精と遊ぶの巻 | 21

完全生命体、幻想に惑う | 31

## 第2章【破壊神と守護神】

我が名は完全生命体、デストロイアで

ある | 42

異変確定の凶 | 56

設定集その1 | 66

迅速の剣技 | 70

紅い霧と血 | 81

異色の血痕 | 90

設定集その2 | 102

永遠の欲望 | 105

欲望に満ちた光 | 124

舞い散る桜、夜を踊る。 | 136

神ノ火 | 154

発進 | 170

破壊神、降臨 | 184

月光照らされる宴 | 200

途中下車のゴール……ではなかった

212

## 第3章【帝王ノ覚醒】

幻想入りは怪獣だけじゃない	—	222	外伝でのキャラ設定	—	332
集結 悪魔と神と人間	—	237	対峙する悪夢と虚構	—	338
再会	—	247	それぞれのSpeculation	—	—
幻想入りを果たした怪獣	—	252	夢の終わりと目覚め	—	379
外伝【シン・ゴジラ もう一人の帝王】	—	—			
上陸	—	257			
虚構	—	266			
彼に『安心』の日々を	—	289			
地獄、再臨	—	301			
ゴジラ 対 フレディ Nightma	—	316			
ree Fiction	—	—			
異色の来訪者、その名はフレディ・ク	—	—			
ルーガー	—	—			



## 第1章【地に降り立つ獣】 降臨

ここは幻想郷。生命が集う場所。

とある巻物に、こんな言い伝えがある。

『地ニ降り立つ獣、ソレヲ郷ヲ荒ラシ山ヲ越エ、一ツハ世ヲ消シ去ラントスル完全生命体、一ツハソノ地ヲ滅ボサントスル戦闘龍、一ツハ地ヲ破壊スル三方ノ八岐大蛇。

地ニ降り立つ獣、ソレヲ山ヲ越エ、一ツハ空ヲ飛び、ソコニ住マウ生命ヲ守ル守護神、ソレヲ天ニ達スル獣ハ、黒キ鱗ト尾ト背、ソシテ全テヲ焼キ払ウ帝王。コレヲ降臨スレバ世ニ光ト影ガ訪レル。』

この言い伝え、幻想郷の住民が信じるはずもなく、そもそもそんな妖怪がいるはずがないと思っていた。

…そう、思っていたのだ。

くとある日の幻想郷く

??? 「うゝん…」

ここは幻想郷のどこか。といつても、大草原。その真ん中に横たわる人間。いや…妖怪？

??? 「寝ていた…のか？」 よっこいしよ

その人間（妖怪？）は体を起こし、周りを見た。思うことはただ一つ…

??? 「ここは…どこ、なのだ？」 はあ？

我の名はデストロイア。完全生命体と呼ばれ、恐れられる究極の生物だ。…『ヤツ』との戦いに敗れ、最期はメーサー砲とか色々集中攻撃されて爆発したのだ。今でも覚えてる。

いや、そんなことはどうでもいい…良くはないが今はどうでもいい。何故に我の姿が人間になつている!?! 我は死んだはずだ! ああ、あの禍々しい姿は!?! どうなつたのだ!?! …でも尻尾は短いけどあるし、翼も小さいけどある。ツノはないけど。



そもそもここはどこなのだ!? 今回ばかりは助からんかもしれんぞ!

??? 「そんな所で昼寝していると、風邪をひきますよ?」 ザツ

デスト 「ぬう? 誰かいるのか?」

??? 「はい。ここにいますよ。」 バツ

デスト 「ぬわあああ!? 驚かせるな…。」

??? 「君、背中に翼があつて、尻尾があつて…ということとは人間ではないのですね。」

デスト 「まあ、そうだが。」

??? 「よかつたら、ウチ（家）に来ませんか? 案内しますよ。ここに居ても何も変わりません。」

DEST「な、なら有難く…。」

く道中く

DEST「そういえば、お互い名前を言っけなかつたな。我が名はDESTロイア。よろしく。」

???「私は…豊聡耳神子。よろしく。」

神子「何か好きなことある？趣味とか。」

DEST「うん。町を破壊すること…かな？」

神子「…え？」

DEST「あ、ああ…なんでもない…気にしないでくれ…。」つい口が滑った…

神子「私の家には、他にも面白い仲間達がいますよ。楽しみにしててくださいね。」  
デスト「りよ、了解です…。」

# 新たな旅路

く 神霊廟 く

神子「ここが私達の家です。」バーン

デスト「おく…。」

???「そこに居るのは誰じゃ!…って太子様と、誰?」

神子「ああ、布都ですか。ちょうどよかったです。他のみんなも連れてきてくれませんか?」

布都「お安い御用!!」タッタッタッタ…

デスト「今の誰。」

神子「今のは『物部布都』。他にも色々居るので、まあ少しずつ紹介していきますよ。」

??? 「ん？誰だおまえ。」

布都「『屠自古』しかいませんでした〜…。」

神子「まあいいでしょう。」

屠自古「私は『蘇我屠自古』。おまえは？」

デスト「我の名は…。」

神子「…どうかしましたか？」

デスト「いや、考えてたのだが、本名を言うのはあれかなあ…と違ってね。」小聲

神子「代わりの名前があるんですか？」小声

デスト「それを今考えているところなのだよ分かるかね。」小声：

屠自古「おい。名前は？」

デスト「…我の名は『デロイドア・レイス』。レイスでいい。」

屠自古「ではレイス。おまえに問う。その翼と尻尾は本物か？」

デスト「どうだろうな。確かめてみたらどうだ。」

屠自古「答えろ。」

デスト「…本物じゃなかったら付けてないだろうな。」

屠自古「…どこから来た。」

デスト「…そればかりは答えられない。」

屠自古「ほう、どうしてだ？」

デスト「とにかく、答えることはできない。(地下から出てきた…なんて言えないだろうが。)」

屠自古「…まあいいか。」ザツザツザツ…

神子「このあと、何か予定はありますか？…と言っても、ありませんよね。」

デスト「まあな。居場所もないし…」

神子「だからと言って出歩く訳にもいかないし…」

デスト「そうだなあ…」

神デ「うくん…」

デスト「あ、そうだ。旅に出よう。」

神子「…?」

デスト「放浪しておけば、何か見つかるかとしれないし。…ということで、『幻想郷を放浪する』に決定だな。」

神子（勝手に話進められても困るんだが…まあいいか。）

神子「そういえば、『弾幕ごっこ』は分かりますか?」

デスト「ダンマクゴッコ?」



神子「…その様子だと分からないみたいですね。まず簡単に説明すると…」

く少女説明中く

神子「…というわけです。なので早速、スペルカードを作っていきますよ。旅はそれからですよ。」

デスト（スペルカード…我の技…）

候補

- ・ヴァリアブルスライサー
- ・オキシジェン・デストロイヤー・レイ

後は適当に作つときゃいいか。

スペルカード

・ 駆逐斬 『ヴァリアブルスライサー』

・ 駆逐撃 『オキシジエン・デストロイヤー・レイ（オキシジエン・D・レイ）』

デスト「今はこれまでだな…（技少ねえ…）」

## 放浪の先で

く前回までのあらすじとその後く

幻想郷へと降臨したデストロイア。だが、その姿は禍々しいあの悪魔の姿ではなく、正しく人間・妖怪の姿となっていた！そこに現れた豊聡耳神子。

神霊廟に着き、名前を聞かれたデストロイアは、『デロイドア・レイス』と名乗った（これはデストロイアの名を弄って変形させたもの）。その後、弾幕ごっこやスペルカードについての話を聞いたが、肝心のスペルカードが少なすぎる!?!と思っただが、適当に作っておいた。そして舞台は旅に出た所から始まる…。

く放浪中（色々すつ飛ばしましたスミマセン）く

デスト「…放浪するのはいいんだが、どこに行こう。場所も分からないし…。」

デスト「あ、地図貰ったんだっけ。」ぱきっ

デスト「えーと……ここからだ人里？が一番近いかな。…行くか。」

く人里く

商人「いらっしやい、らっしやーい！」からんからん

店長「いいモノ入ってるよお！」

デスト（実際の姿は怖い、デカイ、恐怖の感情。この姿で良かったな…）

泥棒A「逃げろっ！」

泥棒B「あばよ、小娘!!」

??? 「あつ、待ってください！返してください!!」

泥棒C 「返せと言われて返す悪党がいるかよお!!」

泥棒B 「だな！そうと決まれば早く帰ろu痛ッ!」

デスト 「……」

泥棒B 「何見てんだよ。邪魔なんだよ。そこどきやがれ!!」 バツ

デスト 「ツ……!」 ガシッ!

泥棒B 「痛い痛い痛いッ!」 ガシッ!?

デスト 「見ていたぞ、先程の騒ぎ。：見たところ他人の物を奪ったようだな?」

泥棒B 「そうだよ見てたら分かるだろ!ていうか離せッ!!」 バツ!

デスト「誰が離していいと言った？」ガシイッ!!

泥棒B「んだよ離しやがれ！刺すぞオ？」キラ☆

村人 a 「きゃあっ!？」

村人 b 「刃物ッ!？」

デスト「…刺してみろ、そのナイフ。刺してみろ、迷わずにな。」

泥棒B「お言葉に甘えるぜえ!!」ブンッ!

??? 「ッ!？」

泥棒B「ハッハッ！ブツ刺さったぜ!!…あ!？」グシヤア…

デスト「どうした。その程度では我を倒すことはできぬぞ？」ポタポタ…

泥棒B「な、なんだあコイツ!?おまえら刺しまくれエ!!」

泥棒A「オラアッ！」ドスッ！

泥棒C「どうだッ!!」ドスッ！

ドスッ、シュバツ、ドスッ、ドスッ…

デスト「……。」ぷしやあああ…

泥棒A「ファッ!?不死身かコイツ!?!」

泥棒C「これだけ刺しても死なねえなんて…おまえ何者dゴフッ!?!」ドガッ!?!

泥棒A 「お、おい大丈夫か!? …てめえ何しやgグブツ!?」ドガア!?

デスト「……。」ザツ…

泥棒B 「や、止めてくれ…! 止めてください!! そもそも何で関係のない奴が入ってくるんだグツ!?」首ガシツ

デスト「我は通りすがりで寄っただけ。だから入ってこない…! というのは違うだろう?」グググ…

泥棒B 「そ、そうだけど…て、ていうか…く、苦しい…死ぬる…! 死ぬるう!!」グググググ…

デスト「そうか…なら今樂にしてやろう。」バギツ!



泥棒B 「アベシツ!？」

デスト「我の名をよーく覚えておけ。『デロイドア・レイス』、それが我の名だ。…盗ったモノは返してもらおうぞ。」長いからレイスでいい…。

うおおおお！スゲエ!!カッコイイ!!!

??? 「ありがとうございました。」

デスト「礼には及ぼん。ほら、これ。」

??? 「ありがとうございます！優しい人なんですね!!」

デスト「ツ!?わ、我が、優しい?」

??? 「はい！私、『ミステリア・ローレライ』といいます。さつき渡してくれたのは、屋

台で出す大事な食品やお酒が入ってたんです。本当にありがとうございました!!!」

デスト（我が優しい…か。本当はこんなものじゃないんだがなあ…）

ミステイア「良かったら屋台に寄っていきますか？美味しいものが沢山ありますよ  
！」キラキラ☆

デスト「な、なら…有難く寄らせてもらおうとしよう。」ふう…

## 妖精と遊ぶの巻

く前回までのあらすじと流れく

最初に辿り着いたのは人里。そこで泥棒3人組を退治し、ミステイア・ローレライを助ける。

その後、屋台にて空腹を満たし、次の目的地を探す。

ミステイアは、「今から友達のところへ行くので、よかったら一緒にどうですか?」と誘ってきた。

デストロイアは、行く宛もないので行くことにしたのだが…?

く妖精が住む森く

ミステイア「ここです。ここは何処かにいるはずなんです…」

??? 「アイシクルフオール!!」 シュバババ!

デスト「…？」ばしばしっ

??? 「みすちーに近づくなあ!!」 シュバババババ…

デスト「…鬱陶しいぞ餓鬼。」ばしばしばしっ

??? 「ちよ、やめなよチルノちゃん…。なんか、怖そう…だし？」

??? 「うおおおお！大ちゃん、あたいは止めるもんかあ!!」 シュバアアア！

デスト「おいそこの青い餓鬼。」

チルノ「なんだ！名前も知らないのか!?あたいの名前はチルノ！幻想郷で最強の妖精!!さあ来い妖怪、相手をしてやる!!!」

デスト「ほう、幻想郷最強…か。手応えがありそうだなあ…!!」ゴゴゴゴゴゴ…

チルノ（あつれえ…なんかヤバそうだな）

デスト「スペルカードを発動する。駆逐斬『ヴァリアブルスライサー』。」シユバ、シユバ、シユバツ！

チルノ「ちよっ!? タ、タイムウ!?!」ピチューン

デスト「…口程にも無かったな。」

説明しよう。今、彼が使用したスペルカード、駆逐斬『ヴァリアブルスライサー』は手刀である！手刀が変化し、スライサーになって相手を切り裂くのだ!!

チルノ「うう…なんだったんだ今のは…？」

大妖精「すいませんでした…チルノちゃんがご迷惑をお掛けしました…」ぺこり

デスト「まあ構わん。いい実験台にもなった。」

ミステイア「今日は2人しかいないの？」

チルノ「そうなんだよな。全然来ないんだよな…。」

???「みんなそこにいたのか？」

チルノ「あ、ルーミア！よくぞここに来たあ！」

ルーミア「…このお兄さんは誰なのだー？」

大妖精「そういえば名前を聞いてませんでしたね。」

デスト「…我の名は『デロイドア・レイス』。レイスと呼んでくれ。」

チルノ「かくれんぼでもするー？」

ルーミア「そうするのー！」

大妖精「レイスさんも一緒にどうですか？かくれんぼ。」

デスト「…まあ暇だからやってもいいが。」

チルノ「じゃあ鬼やって！んでもって見つけて！」たたたたた…

デスト「…じゃあ10数えるぞ。」

チルノ（どこに隠れよっかな…） 10

大妖精（早く隠れないと…） 9

ルーミア（…なのだー） 8

デスト「…3、2、1、0。さて、探しましょうかね。」

く大妖精・ルーミア 現在地（近い）く

大妖精（あ、来た…）

ルーミア（…来たのかー。）

デスト「木の陰に1人、その上に1人。」



大ルー（…ッ!?)

デスト「ちよつと雑になるが、許してくれ…スペルカード。  
駆逐撃『オキシジエン・D・レイ』。バイオオオオオオオオオ…

大妖精（上に…?）

ルーミア（発射したのかー?）

デスト「『デストロイヤー・レイ』を上空に撃つ。これにより光線は拡散し、辺り一面に散乱する。」

大ルー「…!?’」

デスト「そしてそれらはフルヒット。」

大妖精「痛たたたたたた!!」

ルーミア「ツ!?!」

デスト「まあ威力は抑えているから死ぬことはない。」

大妖精「痛いよう…!」ちらっ

デスト「大妖精、見つけたぞ…?」

大妖精「あっ…!?!」

ルーミア（そ、そういうことなのか…）

チルノ「ここであたい参上!アイシクルフォール!!」シュバババ…!

デスト「おい、遊びの趣旨間違ってるだろ…！」ゴゴゴゴゴ…

チルノ「おらおらおら！喰らええええ！」シユバババツ！！

デスト「チルノ貴様…舐めるなよ…！！」ゴゴゴゴゴ…！

チルノ（な、なんか…ヤバそうだな…けど！）

チルノ「諦めないぞお！！『パーフェクトフリーズ』！！」

デスト「駆逐斬『ヴァリアブルスライサー』ア！！」ズバアツ！！

チルノ「ちよっそれキツイっっ」ピチューン

デスト「我を怒らせること、後悔するがよいぞ…！」

く全員集合く

チルノ「マジスンマセンデシタ」 O R Z

デスト「ふん、下らん。」

## 完全生命体、幻想に惑う

く遊んだ後 デロイドア現在地く

デスト「ふう、さすがに疲れたな。」んく…

デスト「ん？なんだここは…？」

??? 「ここは博麗神社。そして私がこの神社の巫女、『博麗霊夢』。」

デスト「我が名、『デロイドア・レイス』と申す。」

霊夢「ふーん…貴方、見たところ妖怪にしか見えないわね…。」

デスト「だったらどうする。」

霊夢「ここで退治するしか考えはないわ…。貴方、弾幕や能力は分かるわよね？」

デスト「…んあ？」はて？

霊夢「…分かってないようね。もしかして、貴方が噂の『紅き狩人』ね。」

デスト「…はあ？」

霊夢「あ、『不死の魔神』とも言われてるわよ。」

デスト「いや、それはなんだ。」

霊夢「二つ名とか異名とかね。どっちがお好みかしら…？」

デスト「我は『紅き狩人』がいいかな…って違うツ！その弾幕や能力について教えて

くれないか。」

霊夢「……………」指差しっ

デスト「…?」

霊夢「ほら、ここ。入れて。」指差しっ!

デスト「何を。」

霊夢「何って…賽銭に決まってるでしょう!」指差しイツ!

デスト「賽銭? 銭? 金のことか。生憎だが、今は手持ちがないのでな。」

霊夢「…まあいいわ。付いてきて。まず能力について教えてあげる。」階段

く博麗神社く

霊夢 「まず能力というのは、例えば私のを言うと、『空を飛ぶ程度の能力』とかね。」

デスト 「ふむ…。」

霊夢 「他にも『時を止める程度の能力』や、『境界を操る程度の能力』とかね。」

デスト 「ほうほう。」

霊夢 「…何か心当たりないのかしら。最初にイメージできたモノが能力になる確率が高いわ。」何か思い出して頂戴

デスト（我は酸素を吸収し、操る。分裂し、合体する。そして進化して、全てを破壊する。…ん？吸収、進化、破壊…これか!?!）

霊夢 「何か思い出した？」



デスト「う、うむ。やってみよう。霊夢、攻撃してみてくれないか？」

霊夢「え？いいけど。」

デスト（吸収…吸収…）

霊夢「えい！」ズガッ！

デスト「ツ!？」ズガア!？」

霊夢「あら、やり過ぎたかしら…？」

デスト「いや、問題ない。だが何もなかった。次だ。もう一回頼む。」

霊夢「なら、これでどうかしら！」弾幕

デスト（進化…破壊…）

霊夢「喰らいなさいっ！」しゅばばばばばば…！

デスト「はあッ!!」ヴァリアブルスライサー

ズバアッ！

霊夢「え？今、弾幕を…切ったの？」

デスト「…え？」

説明しようッ！今、彼がヴァリアブルスライサーを使用し、弾幕に当てたその瞬間、弾幕は真つ二つに切断され、弾け飛んだ！これこそ彼の、デストロイアの能力！『どんなモノでも破壊する程度の能力（全てのモノとは言っていない）』であるッ!!

霊夢「それが…貴方の能力、ということになるわね。」

デスト「ほう、面白い。」

霊夢「ツ!？」

デスト「霊夢、君のおかげで能力というものを知り、自分を知ることができた。…感謝する。」びゅーん…！

霊夢「あ、ちよっ…行っちゃった。」

くデストロイア 現在地く

デスト「さて、地図を見て次の場所決めるかね…つと。」

その時、地図を取り出して場所を決めようとした、まさにその瞬間だった！遠くから発射音が鳴り響き、極太のレーザーが彼に襲いかかった!!

デスト「なんだよこれはアアア!?」ビューン!!

???「おお、すまんすまん!」

デスト「誰だおまえは…。いきなり光線ブチかましてきやがって…」

魔理沙「私の名前は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだから安心しろ。ちよつと誤射しちまっただけだ。」

デスト「……。」。ぶる。ぶる…

魔理沙「ん?お、おまえ…その左手に持つてる『焼け焦げたような黒い物体』は何だ?」

デスト「焼け焦げたんだよ!これ地図だよ!?ついさつき貴様が誤射した光線で焼け焦げた『地図だったモノ』だ!!」

魔理沙 「おおくそりやあ悪かったな。」

デスト 「詫びて許せるのなら、裁く者など要らぬ…！」

魔理沙 「お、おい、マジでごめんな？」

デスト 「…いいだろう。許してやる。だがその代わり…」

魔理沙 「…その代わり？」

デスト 『『新作の実験台』になってもらう。』 スッ

魔理沙 「…は？」

デスト 「スペルカード、発動。狼爪『『デビルクロウ』』 ゴゴゴゴゴ…

魔理沙 「ちよっ!？」

デスト「フンツ!!」ズバアツ!!

魔理沙「ああ!私の箒があ!?!」ひゅーん…

デスト「ツ!?!危ない!!」ビューーーン!!!

デスト「よつと…。おい、怪我はないか?」

魔理沙「だ、大丈夫だぜ…。そ、それより…//」

デスト「…?」

魔理沙「は、早く降ろしてくれ…だぜ//」お姫様抱っこ

デスト「おお、悪かったな。」↑理由分かってない

魔理沙「きよ、今日はすまなかつたな…。じゃ、じゃあな…。」たたたたたたた…

デスト「…？まあいいか。新作の実験もできた。予想を遥かに超えている。『デストロイヤー・レイ』も、『ヴァリアブルスライサー』も、『デビルクロウ』も。良い出来だ。」

デスト「さて、もうすっかり夜だな…。どこで寝ようか。」

「なんか凄い森の中」

デスト「ふむ、これでよし…。」

説明しておこう。彼は今、仮拠点造りを終えたところである。とは言っても、ベッドと机とカーテンのようなものなど様々だが、これは全て『ヴァリアブルスライサー』と『デビルクロウ』で切って作り出した芸術である！

デスト「さて、明日はどうなることか…。」

## 第2章 【破壊神と守護神】

我が名は完全生命体、デストロイアである

（前回までのあらすじと今後の流れ）

妖精と遊んだデロイドア・レイスは、博麗神社にて博麗霊夢と出会い、『弹幕や能力』について教えてもらう。

そこで、能力を知るために攻撃を受け、試すという方法を使い、見事、『どんなモノ（全てのモノとは言っていない）でも破壊する程度の能力』を発動することができた。

そんな矢先、霧雨魔理沙と出会うが、彼女の八卦炉の誤射によって、地図が焼け焦げてしまう。許す代わりに、新作のスペルカード、狼爪『デビルクロウ』を試した。

だが、そんな彼に安らぎの場などない。

欲望に飢えた闇が、彼を襲う。

そして各地に降臨する獣達。手に入れた光に見えるのは『希望』か『絶望』か、それ



とも『宿命を果たす運命』か？

## 第2章 開演

くデストロイア 仮拠点く

デスト「んく…眠い。まあ起きるけど。」

「さて、今日はどこに行こうか…。」

く人里く

デスト（まず、買い出しだな…。）

おばちゃん「お、いらっしやい！今日も新鮮なのが揃ってるよ!!」

「デザート「えつとだな…狼の肉と、鶏肉と、キノコと…あと飲料水（川の綺麗な水）頂戴。」

おばちゃん「はいこれね。また来てねー！」

デザート「おう。」てくてく

??? 「……………」ジイ…

く仮拠点く

デザート「んじゃあ作るか。」

「材料は、鶏肉とキノコ。焼くだけで完成だな。『オキシジェン・D・レイ』を調整して

焼いて食う。これに限るな……。」ビイオオオオオオ!!

デスト「完成、鶏肉と茸の丸焼き。これが今日の朝飯だな。」

「ガブリ……ウマッ」むっしやむっしや

??? 「……………」ジイ……

く朝飯後く

〔訓練〕

デスト「フツ……フツ……！」 手刀

??? 「……………」ジイー…

「昼飯」

デスト「えーと、昆布の出汁を取って…」

メニュー：鶏肉と茸の丸焼き 昆布出汁（そのまま飲む）

??? 「……………」ジイー…

く 昼から夜までく

デスト「んああ…オキスイズエン・デシユトロイヤー・レエイ…」 Z Z Z

??? 「なあ、これ今倒せるんじゃないか？」

??? 「いや、まだだ。あともう少しだ…。」

く夜 仮拠点く

デスト 「やっぱウマっ」 狼肉、昆布出汁、茸の丸焼き

デスト 「…そこのいるのは誰だ。姿を現せ。」

??? 「バレちゃあ仕方ねえな。」 がさがさつ

デスト 「ほお…おまえは何時ぞやの泥棒か…。」

泥棒B 「久しいな、狩人さんよ。今日は仲間全員を、皆を集めておまえに復讐しにきたのさ！」 ビシッ

デスト 「復讐？ どうしてそんなことを…」

泥棒B 「悔しかったからに決まってるだろうがあ！」 ブスッ

デスト 「…あ？ 何いきなりナイフ刺してんだ。」 ポタポタ…

泥棒B 「な？ 言つたろ？ 刺しても切つても死なねえつて。」

泥棒D 「へえ、殺り甲斐がありそうだねえ…！」

泥棒E 「面白いな、君の体。」

泥棒 F 「早く始めようよお！」

泥棒 C 「そうだな。他の仲間達が来る前に殺つちやおうか。」

泥棒 A 「さあ、全員、突撃イ!!!」 ブサリッ！

泥棒 D 「オラオラオラア！」 ズザッズザッ！

泥棒 E 「ほらほらほらほらあ!!」 グサッ!!!

泥棒 F 「その内死ぬんだから…諦めなよお!!」 ブサッ、グサア…！

泥棒 B 「死ねやあ!!!!」 グサア!!

プツシャアアアアア…

泥棒 D 「ヒッ…!?!」

デスト 「…やはりその程度だったか、雑魚共。」 ぷしやああああ

泥棒 F 「こ、こいつおかしいぞお!!？」

デスト 「…フン。」 ぷしやあ…

ポタポタ…ポタポタ…

泥棒 E 「治癒も早い…!!？」

デスト 「貴様ら…妖怪だな？」

泥棒達 「ツ!？」

泥棒 B 「な、何言ってるんでめえ…?？」



デスト「殺気で満ちているときは、目が赤く発光している。その時点で、人間じゃない。」

泥棒A「…バレちゃあ仕方ねえだよ、バレちゃあ!!」シユイーン…!

妖怪A「ここがおまえの墓場だ!デロイドア・レイス!!」ガルルルル…!

デスト「…やつとか。」

妖怪B「何イ?」

デスト「やつと手応えがありそうな奴が出てきた…!」ゴゴゴゴゴ…!!

妖怪達「…ッ!?」ビクッ

デスト「使わせて貰うぞ…このスペルカード。」スツ…

妖怪C 「よ、よっしや来いやあ!!!」

デスト 「スperlカード、発動。

進化『完全生命体』。」 シュイーン………!!!

妖怪F 「な、何だ……この光は……!?!」

妖怪E 「真打登場……か。」

妖怪D 「さあ来い!……つてええええ!?!」

妖怪A 「な、何だ……何なんだコイツ!?!」

妖怪C 「あれはさっきのヤツなのか!?!」

妖怪B 「…それしかいねえよな!？」

!?! 「グアアアアアアアアアア…!!!」 ゴゴゴゴゴゴ…

妖怪A 「か、掛かれえええ!!」 ガルウ!

〈1分後〉

妖怪A 「た、た、助けてくれえ!!」 掴まれてる

!?! 「グアアアアアアアアアア…」 ポトツ

妖怪A 「うわあつと!?!でもこれで助k」 ブチツ

妖怪B 「ふ…踏まれ…ッ!? ってまた最後俺かよ!？」

!? 「グギヤアアアアアアアアン!!」 オキシジエン・デストロイヤー・レイ

妖怪B 「も、もうダメだろ!?」 ピチューン

我は、その目線を落とし、辺りを見回した。

散らばった妖怪達の屍、木々に飛び散った血液、倒れた巨大樹…

その光景は…残酷だった。

だが、最高だった。今、我の気分は最高潮に達している。

我が名はデロイドア・レイス。

またの名を、  
『完全生命体  
デストロイア』  
…!!!

## 異変確定の凶

く前回までのあらすじと現在く

仮拠点にて自由な生活を送っていたデストロイア。

しかし、そこに何時ぞやの泥棒組が襲撃。ナイフで刺されまくるも大量の出血のみで、ダメージなど全くない。

そんな中、泥棒組が妖怪だということが判明！

そしてデストロイアの本気を引き出し、遂にデストロイアは正体を現した!!妖怪達を蹴散らし、爆発四散させた。が、そこまではよかったのだ。そこまでは…。

くデストロイア 現在地く

やあ皆、元気か？我だ。デロイドア・レイスことデストロイアだ。雑魚共（泥棒）を

ブツ殺したまではないのだ。それはよかったのだ。だが、かなり厄介な事が起きた。

デスト（これ、どうやって元に戻るの…？）

デスト（どうすんだよこれえええ!?このままだと喋れないし図体デカイから下手に動いたら騒ぎを起こすだけだし、空飛ぶ訳にもいかないし…あくどうすればよいのだ!?)

??? 「お困りのようね。」

デスト「グアウ?...ギャウウウツ!?(ぬ?...ってマズイ、今話したら叫んでしまうぞツ!?)」

??? 「大丈夫よ。ほら、このスペルカードを使って。騒ぎになる前に早く元に戻って。」

デスト「グアウウ...」スペカ発動。

くその後く

デスト「いや、本当に助かったぞ。お主、名は何という？」

紫「私は八雲紫。覚えてても覚えなくてもいいわ。」

デスト「我の名は…」

紫「デロイドア・レイス。またの名を完全生命体のデストロイア。」

デスト「ぬっ!?!何故名前を知っている？」

紫「まあ色々あるのよ。じゃ、私帰るわね。」ピシユン…



デスト「ふう、本当に助かったぞ…。」

「こ、これは…大スクープですよお!?」ビューン!

↳翌朝 人里↳

デスト（ふむ、今日も賑わっているな…）ピシヤ

デスト（何か踏んだな。これは…『文々。新聞』?）ペラ…

〔闇夜に謎の妖獣出現!〕

昨夜、魔法の森の近くの森にて、大規模な火災が発生しました。火は無事消火されましたが、その場の近くに、巨大な妖獣が居たという通報がありました。

その妖獣は、『紅い体と羽と尻尾、所々の黄色の部位と、黄金色の角があり、その姿は

禍々しいもの』という情報です。もし見かけたら、各地に設置した『対妖獣作戦部』の天狗達に報告をお願いします。

デスト「……………」

デスト（オイ…ヤツチマツタヨコレ…）

おいおい、これはどういうことだ。昨日八雲紫とかいう奴に助けてもらったのはいいが、それ以前に見つかっていたというのか…。やはり『オキシジェン・デストロイヤー・レイ』をあんな草木が生い茂った場所で使うべきじゃなかったか…!?

まあ逆に人型の姿は見られていなかったようだからな…。いや待てよ、この背中辺りにある羽と尻尾は大丈夫か!? 大体当てはまるだろう!?

そうと決まればさっさと帰ろうか…な。

??? 「おい待て、そこの者。」

デスト 「む？我のことか。」

??? 「それ以外誰がいる。今朝の新聞を読んで思った。その背中羽と尻尾がそれらしくないか？と。」

デスト (ノオオオオオオ!?早速言われたぞおい!?)

??? 「貴方は泥棒を退治してくれた。そのことについては感謝している。だが、これも確認の為だ。私と戦ってほしい。」

デスト 「我は構わんが、その前に名を名乗ってほしかったな。」

慧音 「そうだったな。私は上白沢慧音。寺子屋の歴史の先生をしている。」

デスト「我の名はデロイドア・レイス。長いからレイスでいい。」

慧音「格闘技戦でいいな？」ググッ…

デスト「なんでもいい。」グググッ…

慧音「では私から行くぞッ！たあっ!!」ブンッ

デスト「遅い。それだと、我に拳ひとつ付きはしないな。」ザザッ…

慧音「なら、これならどうだ！うおおおっ!!」乱打

デスト「甘いッ！甘い甘い甘いッ!!」両手ガシッ！

慧音「ぬっ!?!それなら…これで、どうだあああ!!!」頭突きイイ!!!

デスト「…ッ!？」ゴチイイイン!？」

慧音「流石に喰らっただろう。…な、何ッ!？」

り  
デスト「ふむ、よい頭突きだった。痛くはなかったが、良しとしよう。」頭さすりさす

寺子屋の生徒 a 「え？慧音先生の頭突きを喰らって、痛み一つ無いの!？」

生徒 b 「す、すげええッ!？」

デスト「では、今度はこちらから行くぞ…!」

慧音「させるかっ!スペルカード、国符『三種の神器 剣』!!」シャキン!

デスト「ほう、良い剣だ…それならこちらにもよく斬れるよい剣があるのだ。スペルカード、駆逐斬『ヴァリアブルスライサー』。」ジャキッ!!

慧音「クツ…!?」首筋に手刀

デスト「我も暇では無いのだ。この勝負、私の勝ちとさせてもらう。…もうよいだろう?」

慧音「…そうだな。」

デスト「では、帰らせてもらう。」

慧音「一つだけいいか?」

デスト「…なんだ。」

慧音「君は…今朝の新聞に載っていた『紅い妖獣』ではないのかな?」

デスト「…そう思うのならそうだな、上白沢慧音。」ビューン…

生徒b 「カッコイイイイイ!!!」

慧音（レイス君…それなら私は信じるよ。君がそうでないということ…。）

## 設定集その1

作者「はいーい皆さんあけましておめでとうございます！」

ゲスト「…誰だおまえ。」

作者「私はこの作品の『作者』でございます！」

ゲスト「…死ねい。」スパーン（ヴァリアブル）

作者「フアアアアツ!?!…ってなると思った？ねえ、思った？ww」

ゲスト「む？今、私のヴァリアブルスライサーで首を切断した筈…。」

作者「俺は作者だ。死んではいけないのだっ！というか、もし死んだら『おまえも消える』ことになる！」



作者「と、いうことで早速本題に入りましょう。」

### 【本作の設定】

1 まず今作の作品名、【完全生命体、幻想郷を彷徨う】について。

これは完全生命体の二つ名で知られるデストロイアが幻想郷に幻想入りし、幻想郷の世界を彷徨い、色んなことを経験する…という意味です。彷徨いながら彼は何を知り、何を得るのか、それがテーマです。

2 次に、今作の主人公、デストロイアについて。

まずデストロイアそのものについて説明します。

デストロイアは、1995年に公開された『ゴジラVSデストロイア』に登場する怪獣。デストロイアは、VSシリーズの最後の怪獣で、その姿や様子の通り、正に最期を飾る怪獣に相応しい。

元々デストロイアは、微小体、クロール体、幼体、集合体、飛翔体、分裂体、完全体

に分けられる。今作に登場するのは、完全体。

2. 5 本作のデストロイアは人型。赤いジャケツトと赤いジーパン、背中に生えた特徴的な羽とサソリの様な尻尾がある。

性格は劇中でのデストロイアをそのまま移植した様なもの。残忍さなどはまだ登場していないが、その体の頑丈さや器用さなど、全体的にステータスも高い。敵に回すと確実に勝てないだろう。

3 『地に降り立つ獣、それら郷を荒らし山を越え、一つは世を消し去らんとする完全生命体、一つはその地を滅ぼさんとする戦闘龍、一つは三方に分かれ地を破壊する八岐大蛇。』

地に降り立つ獣、それら山を越え、一つは空を翔、そこに住まう生命を守る守護神、それらの天に達する獣は、黒き鱗とその尾と背、そして全てを焼き払う帝王。これら降臨すれば世に光と影が訪れる。』

この伝説の言い伝えについてです。

・『地に降り立つ獣』というのは勿論、怪獣のこと。

・『それら郷を荒らし山を越え』というのは、人里やその他建物を壊しながら山を越え

てくる…という意味。

・『世を消し去らんとする完全生命体』というのは、この世界を破壊する生命体、デストロイアのこと。

・『その地を滅ぼさんとする戦闘龍』というのは、その世界を滅亡へと追い込もうとする戦闘龍、スペースゴジラのこと。

・『三方に分かれ地を破壊する八岐大蛇』というのは、三方に分かれて攻撃するキングギドラのこと。

・『空を翔、住まう生命を守る守護神』というのは、空を飛び、人類を守る守護神、モスラ。

・『すべてを焼き払う帝王』は、ゴジラ。

ひとまず、これで終了となります。

## 迅速の剣技

くデストロイア 現在地く

よお、こんにちは…とても言っておこうか。我だ。デストロイアだ。

早速だが、貴様らに問題だ。

今、我は何処にいると思う？ 4つの中から選ぶのだ。

1. 人里
2. 崖つぷち
3. 仮拠点
4. 博麗神社

…正解は、2番の崖つぷちだ。

え？どうしてそんな所にいるかだつて？理由はたった1つだ。

そこに崖があるからだ…！

野生の妖怪 a 「うっし、行くぞおまえら!!」ギャオー！

デスト（そんなこと言ってる暇なかつたな。理由はアレだ。なんか急に襲ってきたんだ。妖怪が。しかも何匹も、連続で。どうやらあの新聞を見た奴ら、噂を聞いた奴らが挑戦してきてるんだとか。）

デスト「だからこうやって片っ端からぶっ潰してるワケだ。」バキッ！

妖怪 b 「あべしっ!?!」グキッ!?!

デスト「我も暇ではない。終わらせるぞ。駆逐撃『オキシジエン・D・レイ』。」

妖怪達「チュドーン☆

デスト「ふん、雑魚が…。」

???「そこで何をしている!」

デスト「ん?」

???「ここは『妖怪の山』。関係者以外が入ってはいけない場所。なのに何故ここにいる!」

デスト「いや、我も先程から何度も襲われているのだ。」

??? 「それは恐らく私の仲間達だ。おまえを排除しようとしていたのだろう。だが、私はそう簡単には倒れないぞ!!」

デスト 「…名を名乗れ。話はそれからだ。」

権 「私は『犬走権』。この山の見回りをしている白狼天狗だ。」

デスト 「我が名は『デロイドア・レイス』。長いからレイスでいい。」

権 「いくぞ、デロイドア・レイス!!」 シャキン☆

デスト 「駆逐斬『ヴァリアブルスライスッ!』 キーンッ!?

権 「惜しい…。」 ギギギギギ…!

デスト「この手応え、いい…いいぞ貴様。もつと来い…もつとかかつてこい!!」ギギギギ!!!

椀「山窩『エクスペリーズカナン』!」シユババババ!

デスト「これが例の弾幕…か。」ザンツ!

椀「な…弾幕を素手で!」

椀「狗符『レイビーズバイト』!!」シユババババ!!

デスト「無駄無駄無駄無駄ア!!!」ドガガガガガ!!!

椀「ま、また…!」



デスト「…おまえ、権だったか。」

権「そ、そうですよ。」

デスト「権、我は気に入ったぞ。特別に教えてやろう。私の『もう一つの能力』を。」  
ゴゴゴゴゴ……

権「も、もう一つの能力？」

デスト「そう、あれは少し前だったか…。」

く回想く

デスト「ふう、本当に助かったぞ…。」

紫「あ、忘れてたわ。」ピシユン

デスト「む？何だ？」

紫「貴方に『もう1つ能力』をあげようかと思つて。」

デスト「確か我の能力は『全てを破壊する程度の能力』。それ以外に何かあるか？」

紫「想像してみてください。貴方の力を。私が選んであげるわ。」

デスト（破壊以外…分裂、進化、酸素…）

紫「…よし、これでいいかな。貴方の能力。それは『分裂する程度の能力』。」

デスト「ほう、よいものを選んだな。感謝する。」

紫「じゃ、貴方の旅が良いものになることを祈るわ。」ピシユン

く回想終了く

デスト「それが、我のもう1つの能力、『分裂する程度の能力』。キラキラキラ…☆

椛「な…か、身体が…!？」

デストロイア分裂体「これこそ分裂体。もう一つの姿。」子供

椛「え？」

デスト分2「さあ始めようか。」

椛「…え？え？え？」

デスト分3「さあ始めようか。」

権「ええええ!!」

ざわ…ざわ…ざわ…

権「…参りました。」orz

デスト「ふう、疲れた。」↑元に戻った

権（つ、強かった…確実に勝てない相手だ…!）

デスト「さて、長居するのもアレだ。立ち去ることにしよう。じゃあな。」バサ…

権「あ、はい…。」

デスト「…犬走棍。」

棍「な、何ですか？」

デスト「…見応えのある剣の扱いだ。鍛えれば、良い剣士になれる。」バサツ、バサツ、バサツ…

棍「…え？」

バサツ、バサツ、バサツ、バサツ…

棍「デロイドア・レイス…不思議な人だったな…。」

く空中く

デスト「……………」バサツ、バサツ、バサツ…

デスト「次は…何かあるだろうか。どんな物語があるのだろうか。…それを探しに行こうか。」バサツ…!

## 紅い霧と血

くデストロイア 空中く

こんばんは、と言っておこう。我だ。デストロイアだ。今我は空中にいる。つまり飛んでるわけだが…

デスト「…暇だ。とにかく暇だ。もっと血が騒ぐような事は起きないのか…。」

瞬間、彼が飛んでいた空を含めた世界が、一瞬にして紅く染まったッ！

デスト「…ぬ？なんだこの霧は。」ヒュオオオオオ：

「そうよね。厄介だと思わない？」

「お、久しぶり！」

デスト「ん？おまえらは確か…霊夢と魔理沙か。どうかしたか？」

霊夢「どうもこうも…この霧を消しに行くのよ。『紅魔館』に行つてね。」

魔理沙「おまえも来るか？異変解決。楽しいぜ？」

デスト「その異変解決…というのは、『刺激がある』のか？」

魔理沙「勿論だぜ！見たこと無いような世界が見れるし、他の人間や妖怪達にも会え



る、スリリングなのが味わえるぜ!!」

デスト「…同行させてもらう。何か新しいものを見つけてことができるかもしれんかな。」

霊夢「よし、なら3人で行くわよ!各自、後で合流しましょう!!」ビューン!!

魔理沙「了解だぜ!レイス、また後でな!!」ビューン!

デスト「…期待するでしょう。『紅魔館』とやら…。」バサツ、バサツ、バサツ…!

く紅魔館 門前く

デスト「…ここか。」バサバサツ…バサツ

??? 「…どなたでしょうか？関係者以外は立ち入ってははいけません。」

デスト 「我は刺激を求めてここに来た。…引き下がるわけにはいかん。」

美鈴 「私はこここの門番の『紅美鈴』といます。」

デスト 「ほう、ご丁寧に…。我は『デロイドア・レイス』。長いからレイスでいい。」

美鈴 「…では、レイスさん。貴方はここを通りたいですか？」

デスト 「…はい、と言ったら？」

美鈴 「…力尽くで貴方を止めます。」

デスト「そうだな。それしかないな…。さて、始めようぞ、紅美鈴。」ザツ…

美鈴「では私から…参ります！たああああ!!」シユンツ！

デスト「ぬっ…力があるな…。これならどうだ！」駆逐斬スライサー

美鈴「…ツ！」シユバツ！

デスト「避けたか…。次はどうするkツ!?」ズガツ!!

美鈴「余所見をしていると怪我しますよ？」ギギギ…

デスト「…」ギギギギ…

美鈴「たあっ!!!」ズガツ!!!

デスト「…ッ！」ズササササ…

美鈴「…まだ続けますか？」

デスト「…我は待っていたぞ。」

美鈴「…へ？」

デスト「これこそ我が求めていたものだ…!!この胸の昂りを求めていたのだ…!!」ゴ  
ゴゴゴゴ…!!

美鈴「…え？え？え？何ですか!?!」

デスト「だが残念だ。少し期待していたのだが…非常に残念だ。…終わりにする。」駆

逐撃オキシジエンDレイ

美鈴（あ、これ死んだ…）ゴゴゴゴゴ…

デスト「良い闘いだった。…礼を言うぞツ!!」ビオオオオオオオオオ!!!

美鈴「わ、私の生涯に…一片の悔い無しッ!」ピチューン☆

美鈴「チーン☆

デスト「…礼を言うぞ、紅美鈴。」なでなで

く紅魔館 中く

デスト「ふむ、やはり広いな…。」

デスト「さて…随分と物騒な持て成し方だな。」

???「…。。。」つナイフ

デスト「名は何という。」

咲夜「私はこの紅魔館のメイド長を務めております。十六夜咲夜というものです。」

デスト「我の名はデロイドア・レイス。長いからレイスでいい。」

デスト「…じゃあ始めようか。」ザザッ…

咲夜「…『ザ・ワールド』。時よ止まれ…！」キーン…

続くッ！

# 異色の血痕

咲夜「…『ザ・ワールド』。時よ止まれ…!」キーン!

デスト「」

咲夜「まず手始めにナイフを…」シユシユシユッ

デスト「」シユシユシユウ…



咲夜「…解除。」キーン…！

デスト「ツ!?」ザクツザクツザクツザクツ…

咲夜「入ったわね。きっちり全て…ん？全て刺さってるのに…まだ立っていられるのかしら？」

デスト「…？」ぷしゅー☆

咲夜「ならもう一度…」キーン！

デスト「」

咲夜「今度はどうかしら？メイド秘技『殺人ドール』。」シユババババ…！

デスト「」ジャキン、ジャキン、ジャキン、ジャキン…

咲夜「終わりにしましょう…解除ッ！」キーン…！

デスト「……。」ザクツ、ザクツ、ザクツ…

咲夜「どうして？どうして立っていられるの!？」

デスト「ぬ？どうかしたか？」

咲夜「…え？貴方、気がついてないの？」

デスト「いや…だから何が？」

咲夜「その身体中に刺さっているナイフのことよ。」

デスト「ん？ナイフ…え？いつの間に刺さっているのだ？」

咲夜「…痛みを感じないの？」

デスト「そもそも刺さっているという感覚がないな。」

咲夜「…もう一本投げてもいいかしら？」 シャキン

デスト「問題ない。投げろ。」

咲夜「では、お言葉に甘えて…！」 シュバツ！

デスト「…ッ!？」 カキン☆

咲夜「ナ、ナイフを…弾き返した!？」

デスト「…そうだ。我の腹に向かって投げてみる。位置はどこでもいい。何本か同時に思いっきり投げてくれ。」

咲夜「…わ、分かったわ。」 シュバツ、シュバツ、シュバツ…

デスト「…ッ。」 ザクッ

咲夜「…。」

デスト「…ツと。」シャツ…!

咲夜「ナイフを抜い…た!？」

デスト「やはり…な。やはりそうだったか。」プシャアアア…

咲夜「血が…緑色？」

ポタ…ポタ…ポタ…

デスト（やはりそうか。今の私の身体は、少しずつ元に戻りつつある。つい最近まで血が赤く染まっていたのが今は緑、皮膚も硬くなってきたナイフを弾くようになった。これは正しく…『完全生命体の特徴』。）

咲夜「貴方…一体何者なの？」

デスト「……………」

咲夜「まあいいわ。気にしないで。…先に進みなさい。」

デスト「いいのか？ 決着も付いていないのに通すのは。」

咲夜「構わないわ。私が駄目でも、他がいるもの。さあ、行きなさい。」

デスト「…とても興味深い戦いだった。感謝するぞ。」コツ…コツ…コツ…（足音）

咲夜（彼なら…彼ならお嬢様を…止めてくれるかもしれない…）

〈図書館〉

デスト「…広いな。やはり何処を歩いても広いな、この敷地内は。」

???「そこで何をしているの？」

デスト「ツ？」

パチュリー「私はパチュリー・ノーレッジ。ここは図書館だけど、何か用かしら？」

デスト「…はつきり言おう。迷ってしまったのだ。」

パチュリー「誰か探してるの？」

デスト「まあ探してる訳ではないが…この紅い霧をどうにかしようと思つてな。私の仲間達に連れられてやって来たのだ。」

パチュリー「…霊夢や魔理沙のこと？」

デスト「ああ、そうだ。何処にいるか知らないか？」

パチュリー「知ってるわ。」

デスト「そうか。なら案内してほしい。」

パチュリー「分かったわ。でもその前に、一つ話を聞いてほしいの。聞いてくれたら案内してあげる。」

デスト「…良からう。話をしてくれ。」

パチュリー「今回のこの異変、これは『紅霧異変』というの。これは、貴方が来る前に私達が起こした異変。それは霊夢と魔理沙によった解決されたわ。でも、今こうして霧が出ている。これはレミイの独断で起こしたもののなの。」

デスト「…そのレミイというのは？」



パチュリー「この紅魔館の主、『レミリア・スカーレット』のこと。友人なの。彼女は一度異変を起こし、反省したかと思った。だけど、彼女は隙を見ていた。だから今異変が起きているの。私達は反対したのだけれど…耳を傾けようとしなかった。『今しかない』って言うて。」

デスト「……。」

パチュリー「そこで貴方にお願ひがあるの。『彼女を止めて』ほしいの。どんな手を使つてでもいい。何かあつたら私達に言うて。咲夜でも美鈴でも、私でもフランでも。」

デスト「…そのフランというのは妹か？」

パチュリー「ええ。『ブランドル・スカーレット』。長い間幽閉されていたけど、前の異変で少し自由になったわ。力を貸してくれるかも。」

デスト「……。」

パチユリー「お願い…この通りだから…！」 or z

デスト「…顔を上げろ。」

パチユリー「…。」

デスト『約束はできない』が、その望み、受け取ったぞ。…任せろ。」

パチユリー「…ええ、お願いね。じゃあ案内するわ。着いてきて。」コツ、コツ、コツ

…

??? 「お兄さん、誰？」

パチユリー「あらフラン。丁度良かった。貴女も一緒に着いてきて。」

フラン「いいけど…お兄さん誰？」

デスト「我はデロイドア・レイス。長いからレイスでいいぞ。」

フラン「じゃあ…よろしくね！『レイス兄さん』!!」

デスト「あ、ああ…。」コツ、コツ、コツ…

レミリア 現在地（以下紅魔館最深部）

レミリア「…宴の準備は整った。…来るなら来い。『レミリア・スカーレット』が相手をしてやろう…!!」

## 設定集その2

〔本作での設定〕

- ・身長は約180m、体重は約50kg。
- ・赤い髪のみディラム。体は細めと標準の間ぐらい(?)

〔説明〕

デストロイア(デロイドア・レイス)

1995年、12月9日、東京出身(さらに詳しく言うと、先カンブリア期生まれ)。微小体、クロール体、幼体、集合体(分裂体)、飛翔体、完全体の6つの形態が存在する。本作では完全体と分裂体を使用。(1/7までの現在)

とある怪物が炉心溶融(メルトダウン)を起こし、なんやかんやあって、最終的に自衛隊に倒されるという悲しすぎる結末を迎える。※同時に、人類がトドメを刺した数少ない怪物である。

だが、爆発四散した体から魂だけが外れ、消滅の危機を逃れた。生死の狭間を放浪し

て辿り着いたのが幻想郷である。∴が、何故か人型の状態で転生した。

それでも結局は完全生命体。スペルカード、進化『完全生命体』（どこで手に入れたかは不明）を使用すれば例の姿になれるし、『分裂する程度の能力』で分裂体（子供姿）になることも可能。

人型の状態は、スペルカードを使用したデストロイアの姿の時よりは遥かにステータスが低い。だがそのパワーは受け継がれている。

その頑丈な身体は刃物をも弾き返し、その羽で大空を舞い、その尻尾を振るって辺り一面をなぎ払い、左手から発射される 駆逐撃『オキシジェン・デストロイヤー・レイ』で全てを溶かし、破壊し尽くす。他にも手刀をリーチが長い刀に変える 駆逐斬『ヴァリアブルスライサー』、爪を鋭くして思い切り切り裂く 狼爪『デビルクロウ』など。※ 駆逐線や駆逐斬の由来は、オキシジェンデストロイヤーのデストロイヤーの意味、駆逐からきている。

#### 「性格とか色々」

性格は冷静かつ無口に近いが、実際のところ分からない。ひとつ言えることは、『怒らせるとやばい』ということ。

1995年の頃は戦いを好み、ありとあらゆる物を破壊する程の恐ろしさだった。

しかし、幻想郷に来てからガラッと変わり、あまり戦いを好まず、普段は静かにしている。だが、放浪の旅で通り掛かった人里で、泥棒をしている3人組のうちの1人がデストロイアとぶつかり、それが原因で泥棒退治をしたこともあるということから、完全に戦いを好まないようになった訳ではなく、挑戦してきた相手を返り討ちにしたり、自ら刺激を貰いに紅魔館に異変解決をしに行ったりと、完全生命体の称号はきちんと受け継がれている。

だが、ここだけの話……完全生命体の本能が甦りつつあるため、将来異変を起こしたり、辺り周辺を血の海に変えてしまう可能性がある。

### 〔挿絵〕

S. H. Monster Arts のデストロイアの写真です。

昭和風の設定で写真を撮りました。

写真は、空を飛んでいるイメージ。読むときの参考にでもなれば嬉しいです。

# 永遠の欲望

～道中～

デスト「……………」コツ、コツ、コツ…

ドクンツ…

デスト「……………」コツ、コツ…

ドクンツ…

デスト（なんだ…？体が…）

ドクンツ…！ドクンツ！ドクンツ！ドクンドクンドクン…！

デスト「……ッ  
!???!？」

フラン「…どうしたの？レイスお兄さん？」ゆさゆさ

デスト「い…今の我に触れるな…！ち、近づくな…!!」ぐおおお…!？」

パチュリー「…どうかしたの？」

デスト「い、いや…き、気にするな…。先に進め。我も着いて行く…。」

パチュリー「そう。…ならいいけど。」コツ…

フラン「あ、待ってよお！」コツコツコツツ



デスト「……。」

デスト（これは…『本能が目覚めようとしている』のか？）

く紅魔館 最深部く

フラン「お姉さまっ！」

レミリア「あら、フラン。どうかしたの？」

パチュリー「レミィ…今すぐこの霧を戻して。私達は承諾していないわ。」

美鈴「私も言われるがままに門を守っていただけで、霧を出していいとは言ってません！」

咲夜「…お嬢様っ！」

レミリア「うるさいぞっ！…今しか無いのだ。今、この瞬間しかチャンスは無い。『この世界を支配する』という野望を達成できるのは今しか無いっ!!」

咲夜「お嬢様も分かったでしょう!?!前回の事で過ちを知ったはず…。」

レミリア「…あれで私が諦めたとしても思っていたのか?」

咲夜「ッ!?!」

レミリア「この世は愚かだ。自分にとって都合のよくないことは都合のいいようにし、神が作ったわけでもないルールを勝手に作り出し、それを日常へと反映させ、世の中を作る。…私はそんな人間どもが大嫌いなのだ。」

フラン「お姉さま…。」

レミリア「だから私が世の中を変えてみせる！私だけのルールで、この世を変えるツ！！だからまず手始めに霧を出した。」

デスト「……。」

ドクン…

デスト（またか…）

貴様はそれでいいのか…

デスト（ツ!?!）

貴様は止めろと頼まれたはずだ。…止めなくていいのか。

デスト（いや…止めなくてはいけない。）

ならば止めてみせろ。貴様なら出来るはずだ。…我も力を貸そう…。

デスト（貴様は…誰だ。）

我は…『もう一人のデストロイア』。『完全生命体、デストロイア』…!!!

パチュリー「レミイ、考え直して。」

レミリア「…今更無理な話よ。」

レミリア「それでも考え直してほしいと言うのなら…私を倒してからにしてほしいわね。第一、従者が主人に手を出すなんて、許されない行為だけどね。」

パチュリー「くっ…。」

デスト「…ツ！」ビュンツ！

フラン「レイスお兄さん!？」

レミリア「貴方が相手かしら? いいわ。今夜は月も紅いから…本気でいくわッ!?!」  
バキッ!?!

デスト「グオアアアアアア…!!」

霊夢「あら、レイスじゃない。」

魔理沙「でも、何かおかしくないか？見たこともないような姿だし…。」

???「あれは『妖獣体』なのよ。」

魔理沙「だ、誰だぜ!？」

???「ああ、紹介が遅れたわね。私は『ビオランテ』。ビオラって呼んで。」

霊夢「私は博麗霊夢。」

魔理沙「私は霧雨魔理沙だぜっ！」

ビオラ「あ、画面の前のみんなに説明しておくわね。私、元々風見幽香って人の所にいたんだけど…なんか色々あって…分かりやすく言えば『クビ』ってやつね。それで私を拾ってくれたのがレミリアお嬢様ってわけ。」

魔理沙「誰に説明してるんだぜ？」

ビオラ「あ、気にしないで。それで、彼のことなんだけど…」

デスト「…ツ!!!」ガキンツ!

レミリア「クツ…。」ギギギギギ…

ビオラ「あれは、本能の覚醒。彼自身に宿る本能が目覚めたってわけ。」

霊夢「それってつまり…」

ビオラ『『精神状態の暴走』って言った方がいいわね。』

デスト「ガアアアアアッ  
!!!!」

!!  
レミリア「これならどうかしら！神罰『幼きデーモンロード』!!」しゅばばばばば

デスト「…。」キンキンキンキン!!

レミリア「全て壊したか…なら、これでどう？神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」シュ



ゴゴゴゴゴゴ……!

デスト「グオオ……。」

レミリア「貫徹ッ!!!」シユゴオツ!!

デスト「ツ……。グサア……」

レミリア「決まったわね……。」

デスト「……。」

レミリア「あら、腹に貫通しても、なお倒れないなんて…随分とタフなのね…。」

デスト「グオアアアアアア!!」狼爪『デビルクロウ』

レミリア「ぬっ!？」ガギギギギン…!

デスト「グオアアアア!グオオオアアアアアツ!!」ガギギギギンツ!

霊夢「あいつつて…あんな積極的な性格じゃなかったわよね?」

魔理沙「ああ、自分から攻撃することはなかったぜ。」

ピオラ「これも『妖獣体』の特徴ね。」

デスト「グオアアアアアア!!!」

レミリア（何…コイツ…気持ち悪いぐらいタフで、吐き気が出そうなくらい強いんだけど…!?!）

ビオラ「今、彼の腹にはグングニルが刺さってる。それでも倒れない。それが…本来の姿なのよ。」

デスト「グオアアアアアア…アアアアアアッ!?!」ドクン…

ビオラ「感じるわ…聞こえてくるわ…彼の心の声が…。」

デスト「グオアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」シュイイイイン…!

ビオラ「な、なにか来るわ。みんな気をつけて!」ザザツ

デスト「グアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!?」弾幕

レミリア「キャアツ!」シュドーン!

霊夢「ちよ、ちよっと待って!?!地面が抉れてるわよ!?!」

魔理沙「いや、抉れてると言うより…『地面が溶けてる』ように見えるぜ?」

ビオラ「…『マイクロオキシジェン』の影響ね。恐らく、弾幕の中に大量のマイクロオキシジェンを含んでるから、被弾した時に破裂して、辺りに散らばるのよ。」

魔理沙「…なんでそんなに知ってるんだぜ?」

ビオラ「…女の勘よ!」ドヤア☆

作者「説明しよう。」

今、デストロイアの体から放たれた弾幕。これはスペルカードである。その名も、終焉『Disaster of the World』!

または、『災厄の世界』！

大量のミクロオキシゲンを含んだ弾幕が、雨の如く降り注ぐッ!!」

ピオラ「あれは…彼が想う『世界への憎しみ』。感情の表れ…。」

デスト「グオオ…ア…」ドサツ

魔理沙「あ、落ちたぜ。」

霊夢「だ、大丈夫!?!」

デスト「グオ…ア…」

レミリア「……………」ドサツ…

咲夜「お、お嬢様ツ!?お怪我は!?!」

レミリア「だ、大丈夫…。」ボロボロオ…

咲夜「……………」

レミリア「さ、咲夜…ごめんね?」

咲夜「…………ツ!お、お嬢様ツ!!」ウルツ…

デスト「ん…あ？」

霊夢「だ、大丈夫？」

デスト「な、何があつた…？」

魔理沙「お、覚えてないのかだぜ!？」

ピオラ「自分の意思で動くことができない。さらに記憶もない。…それが『妖獣体』なのね。」

デスト「き、貴様は…ヤツの親戚か。」

ピオラ「まあそういうところね。ピオランテよ。ピオラって呼んで。」



デスト「は、初めて…他の怪獣に会った…。」ガクッ

その後、デストロイアは永遠亭に行き、診察してもらったのだが、そこでも新しい出来事があった…というのはまた別のお話。

こうして、2回目の紅霧異変は、解決されたのである。

だが、これはとある異変の序章に過ぎなかった。

その異変こそが、【E t e r n a l D e s i r e】である。

## 欲望に満ちた光

く前回のあらすじと現在く

紅魔館へ2度目の異変解決へと向かった霊夢一向。

暴走したレミリアを止めて欲しいと頼まれたデストロイア。そして決戦の時、デストロイアは妖獣体へと変貌する。

その戦法や様子はまるで別人のように見える。

そしてスペルが発動。 終焉『Disaster of the World』。

弾幕が雨の如く降り注ぐ中、霊夢達が気づいたのは、『扶れた地面』。これは謎の物質による影響で溶けているのだという。

さて、この先どうなるか：物語は永遠亭で診察した後から始まる。

く永遠亭く

デスト「……そんなことがあったのか。後で謝罪をしなければな……。」

永琳「調べ終わったわよ。優曇華院、説明よろしく。」

鈴仙「はい師匠。まず、紅魔館の地面を溶かし尽くした謎の物質についてですが、これは紅魔館のメイド（正式職業不明です☆by作者）、ピオランテさんによると、『ミクロオキシゲン』の影響だと言われています。恐らく、それが謎の物質の正体と疑われます。」

次に、デロイドア・レイスさんの体についてです。

レイスさんの体はとても頑丈で、ナイフやグングニルなどの貫通武器も弾き返したり、刺さっても動じない……ということでしたよね？」

デスト「……らしいな。」

鈴仙「その体は、ピオランテさん曰く、『本来の体に戻りつつある。』ということだし

た。このままでは完全に戻って、意識や感情、記憶も全て消滅してしまう…ということ  
が考えられます。

次、妖獣体についてです。これはまだ詳しくは調べられていないのですが、今分かっ  
ているのは、『自分の意思でなること』はできないということと、『通常の人間体のとき  
に比べると、異常的な強さを得る』ことですね。安易に近づくと、一撃であの世逝きに  
なるレベルだそうです。」

霊夢 「…どういうときに発動するの？」

鈴仙 「それはまだ分かっていません。引き続き、調査をしていくつもりです。レイス  
さん、何か前兆とかありませんでした？」

デスト 「…脳内に直接何か声が聞こえてきた。」

鈴仙 「ふむふむ…直接声が…」メモメモ

DEST「何か話してるのは覚えているのだが…その後は完全に覚えていないのだ。」

鈴仙「…情報ありがとうございます。では、また何かあつたらお知らせしますね。」

魔理沙「さて、私は帰るが、おまえらどうするんだぜ？」

霊夢「私も帰るわ。疲れちゃったもの。縁側でお茶でも飲んでおくわ。」

DEST「我は紅魔館へ寄っていこう。色々と話すことがあるからな。」

魔理沙「その体で大丈夫か？」

DEST「まあ問題ないだろう。じゃあな。」ビューン…

## く紅魔館く

デスト「…ということだ。色々とすまなかつた。」orz

レミリア「いいのよ。元はといえは私が悪いんだし。」

咲夜「止めてくださってありがとうございます…。」ぺこり

ビオラ「さて…レイス君？ちよつとこつち来て。…咲夜さん、ちよつと話をしてきますね。」コツ、コツ、コツ…

く現在地く

ビオラ「さて…昨日貴方は色々あつたわけだけど…。」

デスト「…。」

ビオラ「永遠亭から届いた資料を見て考えると、まず謎の物質は『ミクロオキシゲン』、昨日のあの姿が『妖獣体』、そして溶けて抉られた地面から抽出された謎のモノ、これが『ゴジラ細胞（以下G細胞）』なの。」

デスト「ゴ、ゴジラ…!?!」

ビオラ「おつと、貴方にはあまり聞かせないほうがいい単語だったわね。とにかく、この細胞が抉れた地面から抽出されたの。確かこの地面は、貴方の体から発射された弾幕によって作られたものなのよね？」

デスト「…らしいな。」

ね。」「  
ビオラ「つまり、貴方の体の中にあるG細胞が付着した…それしか考えられないわね。」

デスト「……………」

ビオラ「さらに考えると…」「ビオラ！」

ビオラ「あ、なんですか咲夜さん。」

咲夜「今すぐ博麗神社に来て欲しいの。2人一緒に。」



ビオラ「分かりました。すぐ行きます。…また今度ね。」コツコツコツコツ…

デスト「…フン。」コツコツコツ…

く博麗神社く

紫「今日みんなに集まってもらったのは他でもない。『新たなる異変』についてよ。」

霊夢「…早く言いなさいよ。」

紫「…分かったわ。簡単に言えば、今回の紅霧異変のようなものと似たような異変が各地で起きているの。」

レミリア「そ、それってどういうこと?」つ傘

紫「そのままの意味よ。今回の貴女のように、欲望に満ちた人達が暴走して、異変を起こしているってわけ。」

魔理沙「つ、つまり、今回のレミリアが暴走したように、他の奴も暴走してるってことか!？」

紫「そういうことね。中には『謎の妖獣』も関与しているという噂も流れているわ。」

ビオラ「それはきつと私達のような…」

デスト「怪獣なんだな。」

紫「だから皆、手分けして探して解決してきて欲しいの。グループは私が分けてあるわ。」

まず、「霊夢、魔理沙、咲夜」グループは白玉楼に行つて。

次に、「レミリア、フラン」グループは妖怪の山へ、夜に行つて頂戴。その方が活動しやすいでしょう。あと着いたら私に連絡して。強力な助っ人を呼ぶわ。

次、美鈴は星熊勇儀と地底で合流、その後地霊殿に向かつて。きつと貴女達ならなんとかなるでしょう。

パチュリーとアリス、永遠亭組は引き続き情報収集をお願いするわ。

そしてデロイドア・レイス。貴方はビオラと一緒に。場所は私が案内するわ。」

紫「それと、これは連絡用の『河童特性携帯式連絡機』、略して『携帯』。レミリア達はこれを使って私に連絡して。他の皆も、何かあつたらこれを使って。説明書は本体に貼り付けてあるわ。では皆、武運を祈るわ…解散ッ！」

ビオラ「…レイス君、感じてる？」

デスト「ああ、感じてるとも。」

ビオラ「この感覚は…怪獣ね。」

デスト「そうだな。…我ら以外の怪獣が。」

く白玉楼く

??? 「幽々子様、準備が整いました。」

幽々子様？「あらあら、随分と早いね。もつと時間が掛かると思ってたのに…。」

??? 「彼が手伝ってくれましたから…。」

幽々子様？「…そうね。期待してるわよ妖夢。」

妖夢？「はい。」

幽々子様？「貴方も…期待してるわ。」

??? 「…。」

舞い散る桜、夜を踊る。

く白玉楼にてく

霊夢「…さて、ここが異変の元凶の場所なんだけど…」

魔理沙「何が変わったんだぜ？」

咲夜「あ、妖夢。」

妖夢「…。」

魔理沙「おお！妖夢久しぶりだなっ!!」

霊夢「駄目ッ！今の彼女に近づいたら…」

妖夢「…ッ!!」ジャキンッ!!

魔理沙「おっと危ねッ!?!…おい妖夢何すんだよ。」

妖夢「…これも幽々子様の為。」

咲夜「…今回は何かしら?」

妖夢「幽々子様が『桜の木を大量に持ってきてほしい』…と言われたので。…満開の桜の中、お花見をするんだとか。」

霊夢「それなら地上に出て来ればいいのに…。」

幽々子「この場所だからいいのよ。」

魔理沙「何か違いがあるのか?」

幽々子「…とにかく、この場所じやなきや駄目なのよ。」

咲夜「…返してくれるかしら。まだ咲いてない桜の木々達を。」

幽々子「…断ると言ったら？」

咲夜「…言わなくとも分かるでしょう？」 ジャキン…

幽々子「…そうね。分かったわ。」

霊夢「なら、早く始めましょうか。」

幽々子「じゃあ妖夢はこっちに来て頂戴。」

妖夢「…はい。」 スタスタスタ…



魔理沙「え？お前達がそこにいるんだったら…じゃあ誰が相手をするんだぜ？」

幽々子「…さて、初出陣といきましようか。お願いね？」

??? 「ああ…。」 ザツ…

霊夢「誰…？」

ラドン「…俺の名前は『白亜 翼』。またの名を…『ラドン』。翼でいい。」 FW仕様

魔理沙「…じゃあ翼、おまえが戦うんだな？」

ラドン「…俺は強いぞ？」

咲夜「…3対1、平気なの？」

ラドン「問題ない。俺は空の支配者だ。誰も触れられはしない。」

霊夢「そう…随分と余裕ね…なら早速いくわよ!!」 シュババババ (弾幕)

魔理沙「よっし、いくぜえええ!!」 シュババババ!!

咲夜「覚悟しなさい…!!」 シュバツ、シュババツ、シュババツ、シュババツ!!!

ラドン「…衝撃波『ソニックブーム』!!」 ジュビイイイン…!!!

霊夢「なっ…!?!」

魔理沙「だ、弾幕を…衝撃波で…」

咲夜「相殺した…!?!」

ラドン「俺の『ソニックブーム』は弾幕程度なら簡単に掻き消すことができる。勿論、その体も真つ二つに出来る！」ジユビイイイン!!

霊夢「…!?!は、速い!?!」

ラドン「前を見る博麗の巫女オオツ!!」ズガッ!!

霊夢「グハッ…!?!」ズガア…

魔理沙「霊夢!…クソツ、喰らいやがれ!  
恋符『マスタースパーク』ツ!!…全力だ  
ぜエツ!!!」ブオオオオオオンツ!!!

チュドーーーーンツ  
!!!!!!

魔理沙「や、やったのかだぜ!?!」

シユウウウウ…

ラドン「……………」。

魔理沙「なっ…何故あの全力マスタースパークを受けて、立っていられるんだぜ!？」

ラドン「あのとき、全方位に衝撃波を放って防いだのだ。」

く回想く

魔理沙「全力だぜエツ!!!」ブオオオオオオンツ!!!

ラドン「…全撃波『ソニックブーム・オリエンテーション』。」「ジユビイイイン…!!!」

く回想おわりく

魔理沙「そうだったのか…。」

ラドン「ちなみに、オリエンテーションは、方位とか方向とかいう意味だ。」

咲夜「余所見している暇はないわ。幻世『ザ・ワールド』。』キーン…！」

咲夜「…ツ!!」シュバツ！シュバツ!!

ラドン「」シュバシュバツ！シュバシュバツ!!

咲夜「貴方の時間は私の物…貴方は何も理解出来ぬまま死ぬ…。」

ラドン「」

咲夜「…解除ツ!!」キーン…！」

ラドン「全撃波『ソニックブーム・オリエンテーション』!!」ジュービイイイイイイン  
!!!!

咲夜「なっ!?何ッ!」

カチャカチャ…カチャン…

咲夜「な…時を止めて何も分からなかったはず…それなのに如何にも分かったかのよう  
うに全てのナイフを瞬間的に判断して弾き返した…一体何故ッ!」

ラドン「それさ。『瞬間的に判断』したのさ。」

咲夜「そ…そんなバカな…!？」

ラドン「さて…終わりにしよう…。」

霊夢「ま、待って…!」

ラドン「…2分間だけだ。それか俺の気分次第だ。…待ってやる。」

霊夢「えつと…携帯携帯……あつた。」ピポパポピ…

霊夢（出てよね…）プルルルル…

紫「はーい、ゆかりんだよー☆」プツツ



霊夢 「ちよつと紫、助けて頂戴。今結構ピンチなのよ。」 小声

紫 「…助つ人が欲しいの？」

霊夢 「…そ、そうよ。早くお願い。」

紫 「助つ人はいないけど…ヒントぐらいなら教えてあげるわ。」

霊夢 「とにかくなんでもいいから！」

紫 「…『周りを囲んで同時に攻めなさい』。それしか手は無いわ。」 ブツツ…

霊夢 「え、ちよ…紫？」

霊夢 「…まあいいわ。2人とも、ちよつと…」ごによごによ

魔理沙 「…や、やってみるぜ。」

咲夜 「…分かったわ。」

ラドン 「…時間だ。」

霊夢 「いくわよ皆!!」バツ!

魔理沙 「おう!!」

咲夜 「3人でツ!!」

ラドン「何が来ようと…弾き返してやる…！」↑囲まれてる

霊夢「神霊『夢想封印』ツ！」

魔理沙「魔砲『ファイナルマスタースパーク』ツ!!」

咲夜「傷魂『ソウルスカルプチュア』ツ!!」

霊魔咲「これでどうだアアアツ!!」

ラドン「す、全て弾き返し、ぐっ…アアアアアア!?」ピチューン

霊夢「…やはり勝てなかったみたいね。3方向攻撃には。」

ラドン「ぐううう…これはもう無理だぜ幽々子さんよ…！」

幽々子「仕方ないわね…：ラドン、桜達を返しに行つてあげて。」

ラドン「…ファツ!?俺が運ぶのか!?手伝つてくれよ!？」

幽々子「無・理☆」

ラドン「ぬう…仕方あるまい…！」

霊夢「さて、私達は帰りましょうか…。」

魔理沙「そうだな。腕が疲れてパンパンだぜえ…。」

咲夜「まずはこれでひと段落ね…。」

く博麗神社く

紫「…白玉楼からの反応が無くなったわ。…霊夢達が勝つたみたいね。」

アリス「…ねえ、いい加減教えてよ。謎の場所のこと。妖怪の山と地底と…謎の場所。」

紫「…隕石が落ちた。これで満足かしら？」

アリス「え？出番これだけ？」

デスト「我もこれだけだ。諦めろ。」

く地霊殿く

さとり「…。」

??? 「なんだ？悩み事か？」

さとり「ええ…お空がね…。」

??? 「まあた核暴走かい？」

さとり「もうすぐ地上から人が来るらしいわ。勇儀が連れて来てくれるらしいから、その時は頼んだわよ…『鎧雁』。」

鎧雁「任せろ。」

## 神ノ火

く地底にてく

美鈴 「ここが地底ですか…またまた綺麗な所ですね…。」

??? 「そりやどうも。」

美鈴 「…ツ!?!誰ですか?」 ザザツ…

勇儀 「そう構えんなって。私は『星熊勇儀』。地上から来てくれた奴はおまえのことかい?」

美鈴 「私は『紅美鈴』です。異変が起きたと聞きまして…。」

勇儀 「今回は地霊殿の奴らがトラブったみてえでな。…なかなか厄介だぞ?」



美鈴「私はどんな困難にも耐える、どんな苦しみにも耐える勇気があります！だから、一緒に頑張りましょう!!」

勇儀「ハハッ！頼もしいじゃないか!! さあ、行こうか。案内するよ。」ザッ…!

美鈴「はい！」ザッ、ザッ、ザッ…

く地霊殿前く

さとり「よく来てくださいました。私は『古明地さとり』。この地霊殿の主です。以後お見知り置きを。」ペこり

美鈴「紅美鈴です。今日はよろしくお願いします!」

さとり「さて、案内する前に…お燐。」パチンッ

お燐 「はい！あ、私は火焰猫燐。よろしくね!!」

美鈴 「よろしくお願ひします…!」

お燐 「さとり様、『あの場所』に連れて行けば良いのですね?」

さとり 「ええ。『あの場所』に連れて行ってあげて。」

お燐 「…じゃあ着いてきて!」 ザッ、ザッ…

勇儀 (…なんか怪しいな。いつもならさとりを含めた全員で行くはずなのに…)

さとり 「……。」

勇儀（なんでアイツは突っ立ったままなんだ？）

く特設バトル場らしき場所く

お憐「…ここだニヤ！おまえたちには『アイツ』と闘ってもらおう！」ピシッ！

勇儀「なっ!?て、てめえは…!？」

美鈴「知ってるんですか？」

勇儀「知ってるも何も…奴が地底に初めて来て、私が出迎えてやったんだ。その時にヤツは…『私の酒を全部飲みやがった』んだ!!」

??? 「お？あの節は世話になったな星熊勇儀！」

勇儀「ぐぬぬ…。」

美鈴「えーと…お名前は？」

ガイガン「俺の名前は『鎧雁』。そのまま『ガイガン』と呼んでくれ。」

美鈴「それで、何か用ですか？」

ガイガン「まあ強敵に挑む前の腕試し、いわば俺は『門番』のような役目さ。君たちと闘って、実力を知るってわけ。」

勇儀「あの時の借りはここで返させてもらおうぞ？」バキツ、ゴキツ…

ガイガン「ああ、構わないよ。」ザツ…！

お憐 「勝負は2対1の一発勝負。始めるよー！」 ピピーッ！

勇儀 「いくぜっ!! てりやあ!!」 ブンッ!

ガイガン 「んつと…危ないなおまえッ!? そう殺気立つなって…!」

美鈴 「隙ありッ!!」 ブンッ!!

ガイガン 「よつと…」 サラア…

美鈴 「避けてばかりじゃバトルになりませんよ?」

勇儀 「おい美鈴…ちよつと耳貸せ…」 小声

美鈴 「何ですか?」

勇儀「油断するな…アイツの体は機械だ。あの腕を見る。鎌状の腕だ…。ありや掠つただけでも大怪我だぞ…少し慎重に行こう…。」

美鈴「…分かりました。」

作者「説明しよう。彼女達の目の前に居るガイガン！勿論人型だが、身体はあの『サイボーグ怪獣 ガイガン』そのものなのだ！腕はあのガイガンの鎌、目は赤いサンングラスで覆われており、腹には回転する『ブレイ・カッター』が搭載されている。」

ガイガン「…邪魔をするな作者とかいう奴！ならば今からその機械の力を見せてやる！！」

勇儀「来るぞ…!!」

美鈴「…は、はい！」

ガイガン「鎌『ブラツデイ・トリガー』!!」ズバアツ!!

勇儀「ぐあっ!!」ジユバツ!!

ガイガン「次は君だ紅美鈴! 小型鋸『ブラデッド・スライサー』!!」ジャキジャキンツ  
!! シュルルルル…!!

美鈴「え? なんですかコレ!? 痛い痛いッ!? …けど咲夜さんのナイフに比べたら…でも

やっぱり痛い!」ジャキンジャキン、ジャキンジャキン……!

!!  
ガイガン「もう一発だ……! 拡散光線『ギガリウム・クラスター』!!」ビュイイイン

美鈴「え!? 眼からビームですかあ!」ドゴーン!!

ガイガン「……。」

勇儀「後ろだぜ鳥野郎!!」ガシイッ!!



ガイガン「ウツゲ…ちよ、お、おいおまえ…首が…絞まる…!?」グググググ…

勇儀「今までの…お返しだツ!!」ググツ!!

ガイガン「あ…」ピチューン?

勇儀「あれ?今ピチュったけど…じゃあ今私が絞めてる首は…?」はて?

ガイガン「生首

勇儀「ギヤアアアアアナマクビイイ!?」バツ!?

作者「説明しよう。あ、美鈴ちゃん、横通るよゴメンね。今のガイガンの状態は首だけが無い状態。これ、皆さんこの後の展開、知ってる人は分かるんじゃないですか？……そう！再改造しますよ！！あ、勇儀さんその身体と首貸してください。こちらの方で修理してきますんで。ちよつとお時間かかりますので、先行っててください。……ということでもた後でねー！」

勇儀「…何だアイツ。」

美鈴「さ、さあ？」

お隣「…さ、さあ皆さん、案内しますよ！」

く案内したよ☆く

お空「チーン…

お憐「あれ？お空？…さとり様、これどうなってるんでしょう？」

さとり「えーと…ナニコレ」(´・`・´)

美鈴「え？もしかしたらもしかして？」

勇儀「終わり？」

美鈴「あ、携帯着信…紫さんから？…もしもし？」

紫「今何してるの？異変解決したんじゃないの？とつくに反応は消えてるわよ？」

美鈴「…エ？」

紫「じゃあ勝手に帰ってきてねー。」プツッ

美鈴「プーツ、プーツ、プーツ…」

美鈴「…異変、解決です。ね、勇儀さん本当にありがとうございました」チーン☆

勇儀「ああ…私達が闘ったのは…何だったんだ…？」

ガイガン「隙だらけだッ！ 鋸『ブラッディ・チェンソー』ッ!!」ジュービビイーン!!  
勇儀「死ねやおまえ」バギッ!

ガイガン「起動ウウウ!?!」バギイッ!?

く博麗神社く

紫「さて、残るは妖怪の山と…隕石落下地点。」

パチュリー「いい加減名前変えたら?」

アリス「ならみんなで考えましょう。」

うん…(ー；)

紫「もう隕石落下地点でよくない？」

アリス「じゃあ『メテオフォールポイント』で。」

パチュリー「えつと…『隕石落下地点』。それを英語にしたのね。まあマシだわ。」

くそして時は夜く

紫「準備はいいかしら？今頃レミリア達は妖怪の山に着く頃だから。」

??? 「勿論ですよ。準備万端です!!」

紫「あら？もう着いたのかしら。…はいゆかりんだよ☆「そういうのいいから。」も  
う…ノリが悪いわね。じゃあ助っ人送るからねー！」

紫「…ということ。頼んだわよ。」

??? 「はい。」

「超機竜具…スーパーメカゴジラ、発進しますっ!!」ブオオオオオオオン…!

## 発進

く妖怪の山く

レミリア「…さて、紫に連絡はしておいた。先に進みましょう、フラン。」

フラン「待ってお姉様、あれ何？」ほらアレ

レミリア「あら…何かしら…人？」ザツ、ザツ、ザツ…

??? 「…。」

レミリア「貴方、こんな夜に何をしているのかしら？」

??? 「…。」



レミリア「…質問には答えなさい。貴方は今何をしているのかしら？」

???「・・・。」

レミリア「…どういふつもりかしら。」

???「…計画の邪魔をする奴は排除する。…それだけだ。」

レミリア「何？」

フラン「お姉様！コイツ…人間じゃない!!こんなオーラは人間じゃない!!!」

レミリア「何ですって!?!」

???「…よくぞ気づいたな吸血鬼。」

レミリア「…名を名乗りなさい。私はレミリア・スカーレット。」

フラン「私はフランドール・スカーレット。」

X星人「私はX星人。いや、私達と言っておこうか。」

レミリア「…どうということ？」

X星人達「…ツ！」 ザザザザ…！

フラン「か、囲まれた？」

レミリア「こんなの、私達の敵じゃないわ。」

X星人「相手をするのは私達じゃあない。…さて、呼ぼうか。」

レミリア「…？」

X星人「来い…アンギラス、キングシーサー、クモンガ、ヘドラ、エビラ!!」

アンギ「…!」ザザツ…!

シーサー「…!!」ザザ…!

クモ「…。」ササツ…!

ヘドラ「…。」ゴプ…

エビラ「…。」かにかに…

…ちなみに全員人型です。縦に並んでいます。

レミリア「…え？如何にも数の暴力よねこれ。」

フラン「ソウダヨネオネエサマ…。」

X星人（ガイガンとラドンが裏切ったのは予想外だったが…まあいいだろう。計画は順調に進んでいる。）

レミリア「一気にケリをつけてやる！神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」シュ  
バアアアアン!!!

アング「…ッ!!」地面潜った

シーサー「…ッ!?」ジャンプした?

クモ「…?」避けなくても当たらない（つまり身長が低い。）

エビラ「…ッ!?」貫通した

ヘドラ「…!?!?!」貫通したエビラが飛んできた

エビラ「」シューーン…!

ヘドラ「…ッ!?!」刺さった

エビラ「」チーン☆

フラン「禁忌『レーヴァテイン』!!」シユバアアア!!

ヘドラ「…!?!?!」じたばたじたばた

エビラ「」

グサア☆

X星人（おい…これどっかで見たことあるぞ…）

レミリア「でも、これじゃ完璧に不利だわ…。」

フラン「どうすれば…。」

??? 「おまたせしましたっ！」 ビューン！

レミリア「あら、貴方が紫から送られてきた人？」

竜呉「はい！『超機竜呉』といます。…ちなみに後ろにいるのは『ガルーダ』といます。」人型

ガルーダ「…よろしく」機械型（劇中のを縮小したやつ）

フラン「じゃあ、皆で叩きまくろう！」

X星人「…いけおまえたち。叩き潰せ。」

アング「…叩き潰されるのは貴方の方です。」バキッ！

X星人「ッ!？」バキィ…

アング「あ、どうも、『アングラス』です。後は頼みましたよ。」ズゴゴゴゴゴ…

レミリア「…地面潜った？」

竜呉「さて、早く片付けましょう。皆さんが待ってます。…ガルーダ！いくぞ!!」

ガルーダ「…うん。」ビューン…!

X星人「…コイツで終わらせてやる！来い…モンスターX。」

ゴゴゴゴゴ…!

レミリア「な、何!？」

フラン「お、大きい…!？」



モンスターX「・・・！」 怪獣

竜呉「スペルカード発動！超機『スーパーメカゴジラ』!!」ピカアアアア…!

レミリア「ここ、今度は何よ!?!」

フラン「あ、竜呉が!…:竜に?」

スーパーメカゴジラ「クオアアアアンツ!!!」

モンスターX「・・・!?!」

スーパーゴジ「クオアアアアン…:!!」メガバスター(熱線)

モンスターX「・・・!?・・・!?」シユババババ：

スーパーゴジ「クオオアアアン…!!!」ハイパワーメーサビームキャノン

モンスターX「・・・！」ピヨーン

フラン「あ、避けた。」

X星人「…仕方ない。一旦引くぞ。」ピシユン：

レミリア「消えた…わね。」

フラン「今回何もしてないよね私達。」

竜呉「さて、帰りましょうか皆さん。」

フラン「うわっ!?!いつの間に!?!」

竜呉「『消えた…わね。』辺りからですよ。」

レミリア「ふう…。」

く博麗神社く

アリス「そういえば紫、『メテオフオールポイント』の異変って何なの？隕石が落ちただけじゃないの？」

紫「そうね。それ以外にも異変はあるわ。『辺り一面に氷柱が発生』した…ということかしらね？」

アリス「氷柱…？」

紫「そう。でも普通の氷柱じゃないわ。…それを調べに行かせるの。」

ビオラ「遂に私達の出番？」

デスト「そうだな。…思う存分暴れさせてもらおうぞ。」



## 破壊神、降臨

くメテオフオールポイント 入口前く

デスト 「あれが『メテオフオールポイント』か。」

ビオラ 「でも入口が氷で凍ってて先へは行けないわね…。」

デスト 「…ならばどうするか、分かるだろう？」

ビオラ 「…決まってるわよ。」

デスビオ 「砕いて破壊するのみ…ッ！」

デスト「駆逐撃『オキシジエン・デストロイヤー・レイ』!!」ビイイイン!!

ビオラ「樹液『ウッドツリーブレス』!!」シャアアア…!

ドゴーン! ガラガラガラ…

デスト「さて、先に進もうか。」パラパラ…

くメテオフオールポイント 道中く

デスト「……それなら、隕石の落下場所を『メテオライトケープ』と名付けよう。」

ビオラ「『隕石洞窟』…。」

デスト「それにしても…一面氷柱と氷だらけだな…。」

ビオラ「この氷の元凶って…『アレ』よね。」

デスト「ああ…『アイツ』しか思い当たらん。」

くメテオライトケープく

デスト「ここが『メテオライトケープ』か。」

ビオラ「凍り方が酷くなってきたわね…。」

デスト「チツ、邪魔な氷柱だ…。」パリンッ！

ビオラ「見て！…隕石が埋まってる!!」ザツ、ザツ、ザツ…



デスト「…氷のバリケードがあるな。」

??? 「その隕石に近づくな…。」 ザツ…

デスト「おまえは…『スペースゴジラ』!？」

スペゴジ「その隕石は大切な物だ。立ち去ってもらいたい。」

デスト「はいそうですか、と言って立ち去るとでも？」

スペゴジ「まあそうだな。だが、それは大切な物。」

デスト「…どうして洞窟を凍らせた？」

スペゴジ「他の妖怪たちを近づかせない為…それ以外に理由などない！」 ザザツ…!

デスト「良からう。…いくぞビオランテ。」ザザツ…!

??? 「その勝負、待ってもらってもよろしくて?」

デスト「き、貴様は…八雲…紫?」

紫「フフツ…。」

ビオラ「何故貴女がここに?」

紫「言わずとも分かるでしょう…?」

デスト「まさか、これまでの異変も全て…。」

紫「…そう。私が仕組んだこと。怪獣達を幻想入りさせたのも私。」

デスト「…我も貴様の手によって連れてこられた訳か？」

紫「いや、貴方は計画外だったわ。連れてきた覚えもないし。」

デスト「なら…何故我は今ここにいる？」

紫「貴方は1995年に死んだ…はずだった。それが何故か魂だけ抜け出して、ここにやってきた…違うかしら。」

デスト「フン…。」

紫「とにかく、貴方は計画には不必要。よって排除させてもらうわ。…スペースゴジラ。」

スペゴジ「隕石龍『戦闘破壊神』。」ビシユアアアアア…

ビオラ「なっ…なっ!?!」

デスト「こ、これは…」

スペースゴジラ「ピギアアアアアアアアッ!!!」ドゴーンツ!

デスト「洞窟を突き破る程の大きさ…まあ当たり前だな。」破片が頭に当たっているな

ビオラ「やりましょう。2人で。」

デスト「仕方ないな…！」ピシユアアアアアアア…

デストロイア「グギアアアアアアアアアアアツ!!!」

ビオランテ「クキヤオオオオオオオオ…!!!」

スペゴジ「キイアアアアアアアアアアアツ!!」氷柱飛ばし

デスト「グギアアアアアアアアアアアツ!!」グサアツ!?

ビオラ「クオオオオオオオオオオン…!?!」グサアツ!?

※ここからは咆哮と皆様のご想像でお楽しみ下さい。

スペゴジ「ピギアアアア!!」ガリイツ!

デスト「グギアアアアア!!」ガリイツ!

ビオラ「クオオオオオン!」シユルルルル…!

スペゴジ「ピギアアア!」ググググ…!

デスト「グギイイイイン!!」ヴァリアブルスライサー

スpegジ「ピギイイン…!?」スバアツ!

デスト「グギヤアアアアンツ!!」ズバツ、ズバツ、ズバアツ!

スpegジ「ピギイイ…!!」ズバア…!

ピオラ「クオオオオオオン!!」ウツドツリーブレス

デスト「グギヤアアアアン!!」オキシジエン・D・レイ

ズゴーーーン…!!!

スpegジ「ピギイオオオオオ…!」フオトン・リアクティブ・シールド

デスト「グギアツ!?グギアアア!? (何!?耐えられたか!?)」

ビオラ「クオオオオオ… (氷で防いだのね…)」

スペゴジ「ピギイイアアアン!!! (無駄無駄無駄ア!!!)」 コロナビーム

デスト「グアアアア…!?!」

ビオラ「クオオオオオオオン…!?!」 チュバーン!?

デスト「…くっ、元に戻ってしまっただか。」



スpegジ「何だ…その程度か。」

デスト「『ヤツ』がいれば…『アイツ』がいればこんなやつ…!!」

スpegジ「さて…とどめだ…!」

シユウウウウ…

スpegジ「ぐっ…!?!」チュドーン…!!

デスト「ぬ…確かおまえは…」

機龍「MFS-3、3式機龍。…機龍と呼んでくれ。」

デスト「…機龍、何故ここに？」

機龍「たまたま通りかかったら戦っていたのでな。」

デスト「…感謝するぞ。機龍。」

機龍「さて、スペースゴジラ。覚悟してもらおう。」

ビオラ（よく見たらこれ、全員親戚みたいなものよね…）

デストロイア：G細胞

ビオランテ：G細胞

スペースゴジラ：G（ry

3式機龍：骨格が初代ゴジラ

スpegジ「さて、決着をつけようか。」

デスト「いくぞ…ビオランテ、3式機龍!!」

ビオラ「私達のG魂（ゴジラソウル）、刻み込んであげる!!」

機龍「3式機龍、出る!!」

スpegジ「甘い…甘いぞ貴様らアア!!」コロナビーム

デスト「同じ手は効かん…!ビオランテ!!」ズアツ!

ビオラ「操演『ハエトリヅタ』!!」シユルルルル

スpegジ「ぐっ!?う、動けん…!?」拘束

デスト「いくぞ機龍!!」

機龍「…分かった。」

デスト「駆逐斬『ヴァリアブルスライサー』!!」スバアツ!!

スpegジ「ぐううう…!!?」

デスト「決めろ機龍!!」

機龍「いくぞ…!!轟撃『ハイパーメーサー砲』!!」ズアアアアアツ!!!

スpegジ「グアツ…アアアア…!!!」ピチューン…!

機龍「…終わったな。」

デスト「…感謝するぞ機龍。」

くスキマく

紫「生命反応…ゼロ…。」

紫「…仕方ないわね。」

## 月光照らされる宴

くあらすじく

次々と発生する異変を解決したデストロイア達。

それを祝うため、博麗神社にて宴会が開かれることになった。

彼らは、月光の光に照らされながら何を想うのか…。

く博麗神社く

霊夢 「さて、今日は飲むわよ。」

魔理沙 「いえーい！飲むぜー！！」

文 「今日の宴会は結構な人数が集まりましたねえ。」

デスト「何だ…『宴会』とは…？」

ビオラ「私たちの世界でいう『飲み会』のようなものよ。ほら、よく『さざりいまん』とかいうのがやってるやつよ。」

デスト「…了解した。」

霊夢「レイス…？始めるわよ。」

デスト「…分かっている。」ザツ…

5分後

勇儀「なあなあ、もつと飲もうぜ。な？な？」

萃香「そうだよ？…そうだ。どっちが多く飲めるか勝負しようよ！」

勇儀「お、いいねえ。…で、お嬢ちゃんも勿論やるよな？」

ピオラ「当たり前よ。売られた喧嘩は売り返す。それが『ゴジラ一族のやり方』なんですもの。…早速始めましょう！」



〜1時間後〜

霊夢 「はあーいwもつと酒持ってこーいww」

魔理沙 「れ、霊夢…？おまえ、酒飲みすぎじゃねえか？」 大丈夫なのかぜ？

霊夢 「大丈夫よお〜？ほおらこんなに元気イ〜！」 魔理沙にダイブ

魔理沙 「うおっ!?! やっぱりおまえ酔ってるよ……つて酒臭ツ!?!」 うぐぐ…!?!

デスト「ふむ、酒というのは実に美味だ。…だが酔い痴れるまで飲むのは体に良くない。月を見ながらゆっくりと飲むのが一番であろう。」

ラドン「隣空いてるかい？」

デスト「む、おまえは…『ラドン（白亜翼）』か。うむ、空いているぞ。」

ラドン「んじゃ、失礼しますよつと。」へへッ…！

デスト「ラドンよ。我は思う。もう一度『ヤツ』に会えることができるのなら…その時に我は謝罪しようと思う。」

ラドン「おーん？それはなんでだい？」

デスト「『ヤツ』の息子を殺したのだからな。…後々考えれば、悪いことをしたと思っ  
ている。」

※その後息子は復活してます

ラドン「おんやあ？柄にもないこと言っちゃって…。」

デスト「貴様はどう思う。」グビツ：

ラドン「ん？何が？」話しながら飲めるのか：

デスト「この幻想郷に：『ヤツ』は来ると思うか？」

ラドン「……………」。

ラドン「俺はそう思うぞ。『ヤツ』ならこんな環境、無理矢理にでも受け入れて、少しでも早く慣れようとして：：そうやってたまに失敗して：：アイツらしく生きると思うぜ？」

デスト「そうか。」ザザッ…

ラドン「んお？どこに行くんだ？」

デスト「…いや、座っているのは性に合わなくてな。」ザッ、ザッ…

ラドン「…へっ、そうかい。」グビッ…

く日時が変わる頃く

萃香「ちよつ…おまえ、まだ飲むつもりかよお…」

勇儀「さ、さすがにつ…この私も…腹がつ!？」

ビオラ「…『酒は飲んでも飲まれるな』ですわ。」ゴクツ…!

作者「説明しよう。今現在、この博麗神社では宴会が行われているが、その人々は酒に酔いしれ、ほとんどが眠っている。

…そんな中、ただ一人、神社の階段を下りていく者がいた。」

デスト「……………」

デスト「行くか。何者にも会わぬ場所にな…。」ザツ…

くスキマく

藍「紫様、準備が整いました。」

紫「分かったわ。…もう下がっていいわよ。」

藍「…はっ。」

橙「藍しやまろ。紫しやまは何をしてるんですか？」

藍「触ったらダメだよ。…おいで、橙。」

橙「はあい!!」トコトコ…



t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

紫「さあ、『帝王』の…降臨の刻よ。」

## 途中下車のゴール……ではなかった

これまでのあらすじ

ある異変が起きてから数ヶ月が経ったある日のこと、空にひとつの影。彼こそが、幻想郷を噂で広めた『デロイドア・レイス』ことデストロイアである。

彼は現在、幻想郷中を飛び回り、誰にも姿を見られないように場所を変えながら過ごしている。

彼自身、「これ以上異変を起こすのは危険だ」という想いと、「何か嫌な予感がする」という気持ちがあるらしく、こうやって飛び回って回避しているのだとか。そして、彼が飛び回っているところから始まる。

く空中く

デスト（ふむ……次はどこへ行くこうか……）バサツ、バサツ……

デスト（む、あれは…墓地？…行ってみるか。）ヒュオオオン…！

彼が急降下した先は墓地だった。

〈墓地〉

デスト「…気味が悪いな。」

小傘（お、キタキタ…！）アタックチャンス！

デスト「…。」

小傘「驚けエエツ!!」バアツ!!

デスト「……………」

小傘「あ、あれれ?羽がある…尻尾も…!?!」

デスト「…なんだ小娘。」

小傘「に、人間じゃ…ない?」

デスト「聞いているのか小娘…!」

小傘「ヒツ…ご、ごめんなさい…」うるうる…（涙）

デスト「なっ…お、おい…な、泣くな娘。」

小傘「…殺さない？」うるっ…

デスト「貴様を殺す理由が無かろう。」

小傘「…ッ！」ザッザッザッザッ…！

小傘 は にげだした！

デスト「…行ったか。…さて、この先何が続いているのだ？」

く命蓮寺く

デスト（なんだこの場所は…とても懐かしい気持ちだ。）

響子「こんにちはあー!!!」

デスト「ぬツ!?み、耳が…!?」キーン…

響子「あ、すみません。私、幽谷響子といいます。」

デスト「我は…」

??? 「ちよつと待てっ!!」

響「デス「え？（ぬ？）」

ナズーリン「そいつから離れるッ！そいつからは…異様なオーラを感じるッ!!」

聖「あら、お客様？それなら早く案内してあげなさいな。」

ナズ「…連いてこい。」

く命蓮寺 部屋く

聖「では、まだ今後の行き先は決まってるんですね？」

デスト「ああ…そうだな。」

聖「それなら人里にある掲示板を見てみてはどうでしょう？」

デスト「掲示板…？」

聖「人間達が依頼した依頼書が貼られているの。行ってみたら？」

く人里く

デスト（と言われて来てみたが…。）



デスト（なんだこの依頼の量は!?!多すぎる…多すぎるぞ!?!）

デスト「では…この『妖怪退治求ム』というのにしてみようか。」スツ…

だが、彼が手を伸ばした先には、もう1つの…『手』。

「…あ。」

??? 「おん？君もこのクエストを受注するつもりだったのかい？奇遇だな、俺もだよ。」

デスト「……。」

??? 「一緒にどうだい？クエスト。」

デスト「…馴れ馴れしく話しかけるな。」

??? 「おつと、すまねえな。俺は『覇鏡幻夢』。よろしくな!!」

デスト「我が名はデロイドア・レイス。…よろしく。」

幻夢「さて、今から討伐しに行くけど…君も行くかい？」

デスト「…いいだろう。」

幻夢「そうこなくちやあな…！さて、一狩りいこうぜツ!!!」いやっふう…!!!

## 第3章【帝王ノ覚醒】

## 幻想入りは怪獣だけじゃない

くあらすじく

舞台は外の世界、人間が住む地球。

この世界には数え切れない程の人間がいる。その1人が、彼だ。『荒神竜也』。高校に入学したばかりの1年生。

彼は自転車競技部に所属していて、大の自転車好きである。

彼の特技は『ヲタ芸』である。

ヲタ芸とは、サイリウムを振り、技を行うことである。

彼はそれが特技だ。…というか趣味だ。

だが、通学途中に車と衝突事故を起こし、死亡してしまう。

そして、彼は幻想入りを果たすのだが…

く幻想郷く

竜也「うくん……ここは……？」

彼が起きた場所からは大きな鳥居が見えた。

霊夢「あんた……そんなところで寝てると、風邪ひくわよ？」

竜也 「んっ…え？ここは？」

霊夢 「ここは幻想郷。見た感じ…『外来人』ね。ところで…そこに倒れてる物は何？」

竜也 「ん？…ってコレ俺のロードじゃん!？」

霊夢 「…何があつたのか、詳しく教えてもらえないかしら？」

竜也 「え、えーと…」

く博麗神社く

霊夢「…事故にあつて幻想入りした訳ね。それでその『自転車』？とやらが速いらしいわね。」

竜也「正しくは『ロードレーサー』ですけどね。…えーと、なんと呼べば…」

霊夢「私は博麗霊夢。貴方は？」

竜也「俺は荒神竜也。よろしく！」

霊夢「さて、それじゃあこの幻想郷で生きていくために『スペルカード』を作っているわよ。」

竜也「さつき説明したやつですね。」

霊夢「何か武器になりそうな物はない？」

竜也「ぶ、武器…武器…『サイリウム』しかないな…」

霊夢「それよ。その『さいりうむ』ってやつが使えるわ。ここにスペルカードの素があるから、作ってみて。」



竜也「う、うん。」

↳製作後↳

竜也「…できたっ！」

霊夢「よし、これで安心ね。じゃあ、試しに私と戦いましょうか。『弹幕ごっこ』で。」

竜也「え？いきなりですか？」

霊夢「実践あるのみよ。ほら、行きましょう。」

## 【荒神竜也 所持スペルカード】

- ・ 防符『タイガー・リフレクト』
- ・ 弾符『Over Action Dolphin (OAD)』
- ・ 地符『ロザリオの怒り』
- ・ 打符『皆に捧げるロマンス』
- ・ 斬打『ムラマサの刃』

く何か広い所く

霊夢「さて、かかってきなさい。」

竜也「言われなくても……！弾符『OAD』!!」シュバババ……！

※基本的に、竜也が使うスペルカードは弾幕型。  
その技の形に沿って弾幕が高速で発射される。

霊夢 「いいじゃない……！次はこっちからいくわよ!!」 ビュンツ！

竜也 (は、速い……!?)

竜也 「スペルカード！防符『タイガー・リフレクト』!!」 ガキーン……!

霊夢 「か、硬い……!？」

今、竜也が使用した2枚のスペルカード。

弾符『OAD』は、Xの文字に沿った弾幕が高速で発射される。

防符『タイガー・リフレクト』は、何も動かず直立不動でいることによって、守りを固める。

霊夢「なら、これならどう？」 シュババババ…!!

竜也「なっ…逃げる隙がない!？」

霊夢「さあ、貴方ならどうする!？」

竜也「逃げ道が無いなら…自分で創り出せばいい！」ザツ…

霊夢「それは…『ロードレーサー』!?」

竜也「名付けて、突符『疾荒迅炎』！炎のように迅速に、尚且つ荒れるように走り去るツ!!」ギョルルルルルル…!!!

今使用したスペルカード、『疾荒迅炎』は、愛用のロードレーサーに乗る…それだけ。

霊夢 「密接にされた弾幕の僅かな隙間を通り抜けていく…なんてやつなの…!!」

竜也 「とうツ！」 シュバツ

霊夢 (ロードレーサーから飛び降りた…?)

竜也 「飛んだ勢いでそのまま…! 地符『ロザリオの怒り』!!」 ジドーンツ!!

地符『ロザリオの怒り』。

ヲタ芸でロザリオというのがある。

腕を挙げ、上でグルグルと回し、それを下に突く。

この『ロザリオの怒り』は、その下に突く勢いで僅かながらの地割れを起こす。

霊夢 「これくらい…避けられるッ！」 ビュンッ！

竜也 「それが甘いんだよおッ！」 シュバアッ！！

霊夢 「なっ!? 地割れを利用して飛ぶなんて…人間を越えてるわよ!?!」

竜也 「決めるぜ…!! 斬打『ムラマサの刃』ッ!!」 ブンッブンッ!!

霊夢 「…ッ！」 パシイッ！

竜也「…クソツ!？」

霊夢「それはただの棒。受け止めるのは簡単だわ。」

竜也「……。」

霊夢「…それだけ戦えれば十分生きられるわ。精進しなさい。」ザツ、ザツ…



竜也「……。」

竜也「もつと……もつと打てるようにならないと……」

く時、同じくしてく

デスト「さて、ここがその場所か？」

幻夢「いくぜ……妖怪ども……。」

妖怪「ガルルルル…!!」

幻夢「俺は『覇鏡幻夢』！人間でも、妖怪でも、神でもない…何者でもない存在。どの位置にも属さない獣！俺が貴様らを成敗してやるッ!!」

## 集結 悪魔と神と人間

くとある森

幻夢「ケツ…まだいるのかよ…ウジャウジャと!!」ザンツ!

デスト「…ツ。」シユバツ!

??? 「なんだなんだ…この騒ぎは…?」

幻夢「おん? 誰だおまえ? ここは危ないから早く逃げるんだ!!」

竜也「嫌だね。俺はさつき博麗の巫女とやらと戦ってきた。肩慣らしには丁度いいかな。」ゴキツ…

デスト「何者だ、おまえは…」

竜也「俺の名前は『荒神竜也』。よろしく。」

デスト「我が名は『デロイドア・レイス』。」

幻夢「俺は『覇鏡幻夢』だ。さて、3人集まりや文殊の知恵、さつさとここを突破するぜ!!」

妖怪「アルルルルルルオオオオオオ!!」

幻夢「鈍い…ッ!」ザンッ!

妖怪「ガウツルッ!」

デスト「跪け…。」ガシッ…!

妖怪「キャインッ!?!」

デスト「…『オキシジェン・デストロイヤー・レイ』。」「ビイイイイン…！」

竜也「もつと俺を楽しませやがれえ！斬打『ムラマサノ刃』」ブンツブンツ！！

竜也「かあああのお…！」指ばっちゃん

竜也「突符『疾荒迅炎』!!」ギユリリリリリリリ…！」

バ…！！  
竜也「その状態で、弾符『O v e t   A c t i o n   D o l p h i n』！シュバババ

妖怪「キユウ……」

幻夢「なんだよアイツ……俺より目立ちやがって。」

デスト「もう彼に任せようか。」

幻夢「それもそうだな。」

デスト「ところでおまえさつき、『人間でも妖怪でも、神でもない存在』と言っていたが…」

幻夢「ああ、それな。

…俺は元々、幻想入りしてきた外来人、つまり人間だった。

最初の頃は勿論人間で、耐久力も力もなかった。

だが、幻想郷で過ごすにつれ、その体は変化していったんだ。最終的に龍になったんだぜ？w」

デスト「……。」

幻夢「あ、おまえ信じてないだろw」



竜也「おいそこの人達い。終わりましたよお。」

幻夢「お、早いな。…よし、おまえら家に来やがれ！拒否権はないぜ？ww」

く幻夢宅く

幻夢「ただいまあ。」

妹紅「おかえりいっつて…誰。」

幻夢 「やだなあ…忘れたのお？ w」

妹紅 「あらやだ幻夢さん」

幻妹 「だはははははははは w w w」

幻夢 「…冗談させておき。こいつ g」

デスト 「『デロイドア・レイス』だ。よろしく。」

竜也 「『荒神竜也』！よろしく!!」

妹紅「で、何で遅くなっただ？」

幻夢「ああ、人里の依頼を…ねえ？」

デスト「ああ。」

妹紅「外出するときは伝えてって何回言えば分かるのかしら？ええッ？」

幻夢「申し訳ありませんでした」 or z

妹紅「で、今日は泊まってくの？」

デスト「我は帰るぞ。」

竜也「自分はここに残らさせて頂きます。」

幻夢「また会おうな、悪魔さんよ。」

デスト「…そうだな、神よ。」ビューーーン…

## 再会

「なんかどこかしらの平地」

デスト「…フン、久しき再会だな。我だ、デストロイアだ。最近は何も起こらずに暇をしているのだ。強いて言うなら、作者の家にあるフィギュアが壊れたり自転車のフレームが剥離したり……」

幻夢「誰と話してるんだよw w」 ぽんぽん w

竜也「耳元で叫ぶなよ…耳が壊れるだろうが…」 五月蠅えな…

KYマツシュ（以下作者）「やあ皆さん、どうも。作者ですよ。彼らの身の回りで最近何が起きたか、執筆するはずだった物語を短く縮めて、まとめて紹介していくぜ。」

作者「まず、この物語の主な内容を振り返ってみよう。

この物語は1995年、デストロイアがゴジラに敗れたその後、どうなったかという続編を描いていく（予定）物語。その先に待つのは『破壊』という名の殺戮か、それとも『宿命』の運命で、決着を付けることになるのか…。

他の怪獣たちも幻想入りする中、どう生きていくのか…。

そして、一番最近の話で、妖怪共を退治したところで終わっていたね。

これから、22話以降のその後をまとめて一気に紹介するよ。」

まず、『荒神竜也』が幻想入りしたことにより、幻想郷中に自転車が広まった。

竜也自身も、新しいスペルカードを手に入れた。その一枚として、開符『天まで届け、高回転』（スカイハイ・ケイデンス）がある。これは様々な効果を持つが、その内の一つとして、「強引に大会を開き、それに値した地形を強制的に破壊し創造する」という効果がある。

これにより、『第1回 幻想郷自転車競技大会』が開催された。予選を勝ち抜いた強者達がぶつかり合い、山頂ゴール前でデッドヒートした結果、竜也が僅かに先にゴールラインを踏んだ。なお、競り合ったのは2位デストロイア（自転車名はMONSTER）と3位覇鏡幻夢（名前はIILLUSION）。

大会終了後の後日、カマキラスとヘドラの幻想入りが確認された。

カマキラスは『矢桐蟻 迅（やぎりがま じん）』という名前で人里、というより人里から少し離れた何もない草っ原で生活していた。

とあるきつかけにより、『獣寿司屋 きりかまや』という寿司屋を開く。主に怪獣界で食していた魚介類を使用した商品を販売。キリちゃんの愛称で、人々に好かれる。

ヘドラは怪獣状態で登場。博麗霊夢や霧雨魔理沙らと、それに乱入した3式機龍により退治された。

その後は『平泥 硫』に改名。一部にはキモカワとして硫さんと呼ばれる。本人は『硫酸』と呼ばれていると勘違いしており、少し気にしているらしい。

最も最近起きたことは、『武道大会』。

この物語のオリキャラ3人は勿論、他の怪獣や妖怪、人間達も参加した。

この大会の施設には、巨大な広場があり、それは巨大な妖怪、というより怪獣が人間



から元の状態に戻って勝負をする用に作られた。

様々な怪獣が闘う中、覇鏡幻夢は『カタストドラコス』という名の龍になり唯一怪獣でない中闘い抜いた。

デロイドア・レイスはお決まりの言葉、「我が名はデロイドア・レイス」シリーズを言う。だが、無意識で何も考えていなかったのだろう。口が滑り「完全生命体 デストロイア」の名を名乗ってしまったのだ。

ここまで来ると変身するしかなく、断トツで優勝してしまった。その代償は会場破壊という大きな被害であった。

翌日の新聞、その大会の記事よりも大きく広く載り、騒ぎなったりならなかったりした。

作者「…長くなりすぎたな。申し訳ない。」 o r z

## 幻想入りを果たした怪獣

デストロイア

バーニングゴジラとの戦いに敗れたが、死ぬ直前に魂のみが分離して幻想入りを果たす。

最初は素性を隠し生活していたが、時が経つにつれ、少しずつ本性が現れていく。妖怪でも鬼でもないその力は幻想郷の住民達が見たこともないようなもの。

怪獣形態を新聞のネタとして載せられた際には、住民に疑いを掛けられたりした。その結果姿を見せないように各地を飛び回ることになった。

人間の姿になってもその破壊力は健在で、『オキシジエンデストロイヤー・レイ』や『ヴァリアブルスライサー』などを使う。

ビオランテ

幻想入り当初、風見幽香に拾われ、花の世話をしていたが、一輪の花をダメにしたことが原因で追い出されてしまう。野宿していたところをレミリア・スカーレットに拾わ

れる。デストロイアが幻想郷にて初めて会った怪獣である。今作での呼び名は『ピオラ』。

ラドン

白玉楼に住み着いた空の大怪獣。呼び名は『白亜翼』。  
ソニックブームを主な攻撃手段とする。空を音速で飛ぶことが可能で、飛行時の衝撃波でその場を蹴散らす。

ガイガン

地霊殿に住み着いたサイボーグ怪獣。呼び名はそのまま、『鎧雁』。星熊勇儀の酒を飲み干した罪で首を絞められ首が取れ、再改造で復帰するもあまりの防御力の無さに敗北。以降は勇儀とともに酒を飲み合う仲となる。

X星人と仲間たち

X星人のモデルはゴジラFWのあの人。

アンギラス、キンググシーサー、エビラ、ヘドラ、クモンガと共にレミリア達を迎え撃つ。ヘドラとエビラに関しては劇中同様の倒され方をされる。アンギラスには裏切れ、その後モンスターXを召喚するが、駆けつけたスーパーメカゴジラと戦わた後撤退する。

スーパーメカゴジラ

呼び名は『超機竜具』。ガルータといつも一緒。

レミリア達の助っ人として参戦。

劇中同様の技で応戦するが逃げられてしまう。

スペースゴジラ

メテオライトケープに隕石として落下した。全て紫の計画によるもの。

3式機龍

MFS-3、機龍。彼の参戦により親戚同士の戦い（のようなもの）になった。

〔本編未登場〕

カマキラス

『矢桐蠅 迅』と名乗り、『獣寿司 きりかま屋』という怪獣界での料理を提供する怪獣。  
…という話を作りたかったが都合上本編未登場。愛称はキリちゃん。

ヘドラ

怪獣形態からの登場。博麗霊夢らにより退治。

『平泥 硫』に改名すると、硫さんと呼ばれるようになるが、彼自身は『硫酸』と聞こえているため少々気にしている。

「怪獣じゃないけど」

荒神竜也と覇鏡幻夢

荒神竜也は、高校1年生。不慮の事故で、乗っていたロードバイクとカバンと一緒に幻想入りを果たす。

覇鏡幻夢は、別作からの出演。物語の壁を越えて来たのだという。

# 外伝【シン・ゴジラ もう1人の帝王】 上陸

2016年、その年の日本は空前絶後の異変が起きた。

『巨大不明生物』の襲来。

これにより何人もの命がおとされ、一部都市も壊滅的状态となった。

…そしてもうひとつ、幻想郷という世界にも異変は存在する。

これは、その後の巨大不明生物を追っていく話。

くある場所く

(……ここはどこだ。俺は一体何をしていた?)

??? 「ここは生と死の狭間。そして貴方が入ろうとしている世界は……『幻想郷』。」

「……ゲンソウキョー?」

??? 「……そう、幻想郷。……私は八雲紫。この場所の主。」

「俺は……。あれ?俺は……誰だ……?」



紫「貴方の記憶を一部消させてもらったわ。貴方の本当の名は『呉爾羅』。でも幻想郷で生きていくには不便だからね。そうね…貴方の名前は…『蒲田進（かまたすすむ）』なんてどうかしら？」

ゴジラ「…なんだその名前は。」

紫「え？だつてえ最初は蒲田に出没してたでしょお？」

ゴジラ「…好きにしろ。」腕

紫「じゃあ決まりね。…『蒲田進』、ようこそ幻想郷へ。」

## 【設定資料】

・蒲田 進

日本・東京出身。前世は怪獣、呉爾羅。

幻想郷の伝説のひとつとして、『地に降り立つ獣』という書物がある。その中には怪獣が上陸するということが記されてあったが、今回別の意味で上陸を果たした。

体内に『熱核エネルギー変換生体器官』持ち、これまでの種族にはどれも当てはまらない。よって新しい種族を追加する予定。

体内のエネルギーを転用した熱線放射能力がある。火炎状とレーザー状が存在し、任

意で使用可能。ただし、体内のエネルギーには使用制限があるため、連発を続けると火炎放射しか使えなくなる。

身長は高く、首から尻尾にかけて背鰭がある。

常に黒のフードを被り、黒の服を好んで着る。戦闘状態になると背鰭が伸び、本気になる。フードを取る他、血管が浮き出たり、常に相手を睨むようになるなど様々。

右眼は少し長い前髪に隠れており、主に左眼しか見えない。本人は気にしていない模様。

口数は少なく、質問も最低限しか答えない。

情報は以上である。

く 呉爾羅出現地点く

ゴジラ「ここが…ゲンソウキョー…か？森の中のようだが。」キョロキョロ

彼が出現したのは森の中。何も無い。木と草しかない。

あとは…妖怪ぐらい。

??? 「おにいさん、あなたは食べていいヒト？」

ゴジラ「…何を言っている貴様。誰だ。」

ルーミア「あたしルーミア。あなたは？」

ゴジラ「…ゴz……蒲田進。」

ルーミア「進おじさん、あなたは食べてもいいヒト？」

ゴジラ「…好きにしろ。」

ルーミア「いいの？じゃあ…イタダキマス！」あーん…

ゴジラ「・・・。」

ルーミア「…堅ッ!?なにこれ!?おじさんの腕堅くて食べられないよ!」

ゴジラ「なんだ貴様、せっかく食わせてやったというのに…。」ザッザッ…

ルーミア「どこに行くのおじさん?こんな森の中出れるの?」

ゴジラ「…今日は森のどこかで寝る。…もう近づくな。俺の前から失せろ。」ザッザッ  
ザッ…

ルーミア「…いっちゃった。」しよぼーん…

く呉爾羅寝床く

ゴジラ「…まあ寝床といっても草と樹の上だ。別に問題はあるまい。」

## 虚構

前回までのあらすじと現在

八雲紫によって幻想入りを果たした『呉爾羅』こと『蒲田進』。

その先で妖怪、ルーミアと出会うが、森の奥深くへと消える。

そして蒲田進は、今の今まで、誰にも姿を見られていない。…見つかってはいけないのだ。下手に騒ぎを起こしてはいけないのだ。

～現在地～

呉爾羅（…まだ誰にも見つかってないだろうな。こんな奥深く、誰が来るだろうか…）



ガサガサツ…

呉爾羅（ツ!? 誰かいるのか…? いや、いてはいけないのだ。誰かに…見られてはいけないのだが…）ス…

呉爾羅は着ていたパーカーのフードを深く被り直し、様子を伺いに向かう。

く視点変更、魔理沙の家前く

魔理沙「ふう…たくさん採れたな…。」

その手には大量のキノコ。今日も大漁魔理沙ちゃん。  
家に戻ろうとドアノブに手を掛けた。

魔理沙（誰か…見ているな…。）チラッ

く再び視点変更、呉爾羅く

呉爾羅（あの人間…手に何を持っている…？…食料のようにも見えるが。）

呉爾羅は草むらの隙間からその様子を伺っていた。

…が。

呉爾羅（動きが…止まった？）

その人間は、片目でこちらをちらりと見ているではないか。

呉爾羅（物音も気配も、完全に消しているはず…。まさかッ!?)

呉爾羅の目線の先にはでは自分の尻尾。

呉爾羅（まさか尻尾と背鰭で見つかったというのか？）

魔理沙「おい、そこにいるやつ。誰だか知らんがこんな森の奥深くに何の用だ。それとも…私に用があるのか？隠れていたようだが、その背鰭と尻尾が見えてちゃバレバレだぜ？」

そして、その黒い背鰭の主と、人間が対峙する。

呉爾羅「……。」

魔理沙「…なんか言えよ。何しに来たか、とりあえず名前ぐらい言ってくれ。私は霧雨魔理沙。おまえは？」

呉爾羅「…蒲田。蒲田進。」

魔理沙「お？妖怪じゃないのか？その背鰭と尻尾を見れば明らかに人間でもなさそうだな？」（こいつ…外来人か？）

呉爾羅「…霧雨魔理沙だったか。おまえが言えるような立場ではないだろう。その服装から見えてな。」

魔理沙「まあ、そうだな。…あともう少しデカイ声で話してくれ。聞こえづらいんだぜ。男だろ？」

呉爾羅「……。」

魔理沙「で、ここへ何しにきた。」

呉爾羅「……。」

魔理沙「おお、そうかい。言わないなら力尽くで吐かせてもいいんだぜ？人間にも妖怪にも見えない怪しい奴を放っておくわけにはいかないしな。」

呉爾羅「……。」

魔理沙「答えない……ということは吐かせてほしいんだな？」スチャツ

呉爾羅（……来る。）

魔理沙「この八卦炉と私の魔法で、吐かせてやるから覚悟しろよ？」

呉爾羅（…マホウ？）

魔理沙「いけっ！」 ジュジュジュジュ…！

霧雨魔理沙が手を出すと、周りから無数の弾幕が飛んでくる。

呉爾羅（鉛玉…どこの世界でも同じか。） ヒュンッ

呉爾羅はそれを静かに避ける。次々と、当たることなく音も立てず静かに避けていく。

魔理沙「結構やるじゃんか。なら、これはどうだぜ？」 シュババババ……！



呉爾羅 「…鉛玉を増やしたところで無意味だ。」 シュンシュンツ

魔理沙 「やつと喋ったな！じゃあ、これでどうだ！」 スチャツ

魔理沙 「マスター……スパークツ!!!」 シュオオオオオ……!

呉爾羅（ツ…これは!?!） シュオオオオオ…

魔理沙「…これなら流石に吐く気になっただろう…。さて、煙が消えたらその顔を見させてもらうぜ。」

黒煙からでも分かる。その高身長とその影。

魔理沙 「ん？まさかマスタースパークを真面に受けて倒れてない訳な……い……」

呉爾羅 「……………」 シュウウウ……………」

魔理沙 「おまえ……真面に喰らったよな？私のマスタースパーク。片目が隠れていてさ

らにフードで顔が覆われている。避けることもしなかった。それでも平気なのはやっぱり妖怪だからか？」

呉爾羅「…俺は、妖怪でも人間でも何者でもない。」

魔理沙「じゃあなんだ？神様か？笑わせるなよww」

呉爾羅「…おまえがそう思うならそうかもな、霧雨魔理沙。」

魔理沙（こいつ…何者なんだ…？）

呉爾羅「少し…本気を出さないとな…。」ゴゴゴゴゴゴ…

魔理沙（気が…雰囲気が変わった…!?)

その姿は、禍々しいオーラを放つかのよう。背鱗は先ほどよりも長くなった気がする。そして何よりも…

魔理沙（あいつ…フードを外した…？）

フードで覆われていたその顔、前髪も少しながら横に寄った。隠されていた右眼が見えた。その両眼は…獣の眼。確かなのは、『ヤバイという雰囲気』である。

呉爾羅「……ッ。」

魔理沙（来るッ……！）

呉爾羅「……。」クルッ

魔理沙（ッ？……後ろを向いた？）

彼は今、敵に背中を向けている。彼は右腕を前に出した。何をするのか……と思っ

た魔理沙の目に映ったのは彼の背鰭。

魔理沙（紫色に…光っている？）

呉爾羅の手にはみるみる紫色の炎が。

魔理沙「…まさか、おまえ…!?」



止めようとした魔理沙の想いも届くことなく、その手から火炎が放たれた。緑に満ちていた草は一瞬で紅い焔に包まれた。それは火炎状のものからマスタースパークと同じようなレーザー状へと変わった。

森は一瞬で焼き払われた。

魔理沙「貴様…なんでこんなことをした…森を…緑を返せツ!! どうするんだよこの火事!!」

呉爾羅 「…魔法というもので元には戻せないのか。」

魔理沙 「そういう問題じゃあないだろ…。」

「みるみる背鱗は縮んでゆき、色も元に戻った。前髪も、フードも。

呉爾羅 「……。」ザツザツ…

魔理沙「…蒲田…進、だったか。逃げようとしても無駄だ。いつかおまえのもとに異変解決の、妖怪退治のプロ、私の友人の『博麗の巫女』が、おまえを退治しにくるだろう。こんな騒ぎを派手に起こしたんだ。妖怪の山にいる新聞記者の鴉天狗が、おまえを取材しにくるだろう。断つてもしつこく食らいつく天狗だから厄介だろうと思うぜ。」

呉爾羅「……。」

魔理沙「このまま生きていくのなら、いつかこの『幻想郷』の住民全てが敵になるだろうな。私も、博麗の巫女も、鴉天狗も。人間も妖怪も神も、誰も味方してくれなくな

るだろうぜ。」

呉爾羅「……例え全てが敵になつたとしても、だ。…俺は全てを破壊し尽くすまで倒れないつもりだ。」

魔理沙「…その余裕と自信に満ちた顔が崩れるのを楽しみにしておくぜ。…だからさっさと消えてくれ。」

呉爾羅 「…ひとつだけ忠告しておく。」

魔理沙 「…なんだけ。」

呉爾羅 「…俺は『虚構』だ。この世界での虚構でしかない。元々存在しない。だが俺は生きる。例えおまえの仲間が、敵が来たとしても…生きるために俺は遠慮なく潰させてもらおう。今度は火事だけでは済まない。この世界が…崩壊してもなお破壊し続ける

存在、『怪獣』となるだろう。」

## 彼に『安心』の日々を

く前回のあらすじとその後く

蒲田進が魔法の森を灰にしたその日から、犯人の搜索とその犯人の噂が流れ始めた。『闇夜の災い』や『姿無き災害』などの異名が付けられたりなかったり。

だが、事件後の彼の姿を見た者は未だいない。

そして当の本人は、密かに妖怪の山に入ろうとしているが…。

く妖怪の山の中く

呉爾羅（どこへ進んでも草木ばかりだ。だがあまり探索し過ぎるとまずいか…。早く寝床を見つけねばな。）

??? 「誰かそこにいるのですか。」

呉爾羅（…またか。この世界には「安心して隠れられる場所」がないのか…？）

??? 「その辺りを斬りつけていけばいつかは出てきますね。」



呉爾羅（……たまには素直に出るのも有りか？いや、それをするとまた1人目撃者が増えてしまう。しかしだからと言ってずっと潜んでいるのも厳しい。だが……）

??? 「…ツ！」 シュバツ

呉爾羅（なん…だと…？）

彼の目に映っているのは、問答無用で草木を斬り始めた1人の女。そして空からも1人。…ん？空から？

?? 「何をやっているのです? 椛。草なんか切つて。草刈りしている暇があれば…」

椛 「この辺りに侵入者が潜んでいます。この辺りのどこかに。だから、端っこから斬つていけばいつか出てくるんじゃないかと。だから邪魔しないで下さい。射命丸文さん。」

文 「あやや? 別に邪魔をしたつもりはないんですがねえ。

…まあ先程から妙な気配を感じます。いい加減出てきたらどうですか? 『闇夜の災い』さん。」

呉爾羅 「……。」 ガサッ

権 「下がって下さい文さん。ここからは私の仕事です。」

文 「…その代わりに、後で取材をさせてくださいね？」 バサアツ

権 「さて、これで一対一です。貴方を侵入者と見做し、排除を開始します。自己紹介が遅れました。私は犬走権。まあ、これから去ってもらうのに紹介は不要ですが。」

呉爾羅「……。」

椛「…相手が名前を言ったのですから、貴方も名乗るのは当然でしょう？」

呉爾羅「…不必要。」ギロツ

椛「そうですか…。なら早く終わらせましょうか！」ザザツ

呉爾羅「……ッ。」サッ

椛「腕で防ぐ気ですか？ 貴方、頭大丈夫ですか？」

呉爾羅「……。」

椛「なかなか喋らない貴方は、叫ぶ程の痛みを与えましょう。そうすれば自然と声が出るでしょう！」 シュバツ

呉爾羅「……？」ガギツ

椛「か…堅い!? 本当に生身の腕で防ぐとは…。」

呉爾羅「…ッ！」ブン

椛「ガハッ…!? は、腹…パン!?」

犬走椛の口と地面には紅い血。そして蒲田進の腕には傷一つ付いていない。

呉爾羅 「逆に声を出させてやったぞ…」

椛(たった一撃で…この威力…。間違いない。こいつは「油断していると殺される」ヤツだ…!)

呉爾羅「今度は…俺の番…」ゴゴゴゴゴゴ…

椛（来るツ…!?!）

蒲田進は、腕の一振りで剣を弾いて落とした。ガラ空きになった本体を…殴る。殴り、殴り、殴る。簡単に言えば、「フルポッコ」である。

椛「ガッ…」



…。  
呉爾羅 「…俺は取材を受ける気はないと、鴉に言っておけ。寝床を探しにきたただけだ」  
ザッ  
ザッ

椀 「ま、待て…！」

呉爾羅 「…？」  
ピタ

権「せ、せめて…名前だけでも…！」

呉爾羅「…蒲田進。…これでいいか。」ザッ　　ザッ

権（蒲田進…か。文さんが最近興奮している理由が、なんとなく分かった気がする…。）

## 地獄、再臨

「ここまでのあらずじ」

妖怪の山に身を潜める呉爾羅こと蒲田進。

だが、彼にとつての『安心』の場所などなかった。行く先全てが戦場となることを思い知った。

そこで犬走椀と射命丸文と出会う。

戦闘するも圧勝。自分の名を吐き捨てるかのようにした後、またどこかに去っていった。

く人里く

呉爾羅（なんだ…ここはニンゲンが居住している区域なのか。至る所にニンゲン…？いや、それだけじゃない。ここには他の種族の生物も住んでいるのか？）

ここは人里。人間と妖怪が共に過ごしている。妖怪といっても、人を食うような妖怪はおらず、居たとしても、誰かに退治されるだろう。そう、例えばあんな感じ…？のかな？

村人A 「おい、あれ…あまり見たことのない妖怪だな…（小声）」

村人B 「なんだ…？黒い尻尾とあと…顔は暗くてよく見えないな…大丈夫かな？（小

声」

村人C 「きつといざつてときは慧音先生とか妹紅さんがやつつけてくれるさ…多分。  
(小声)」

村人A B 「多分ってなんだよ(なの)」

呉爾羅(チツ…煩い奴らだな…また面倒なことが起きるのか? いや、それはできれば  
控えし)

子供 a 「慧音先生あれだよー。なんか見たことないやつー。」

呉爾羅（早速だよガキ許さん）（\*^ω^）

慧音 「何者だ？君は。この里ではあまり見たことないようだが。」

呉爾羅 「……。」

慧音 「……どうした？」

呉爾羅「…ひとつ頼みがある。」

慧音「なんだ？」

呉爾羅「…俺の皮膚に噛み付いているやつを剥がしてほしいのだが。」

ルーミア「！」がじがじ

慧音「る、ルーミア？な、なにしてるんだ？こつちに來なさい。」

ルーミア「ははあへはへおひはん（また会ったねおじさん）」

呉爾羅「噛むのを止めろ千切れる」

ルーミア「…ぶはっ。だっっておじさんの腕硬くて噛んだら抜けないんだもん。」

慧音「まあ、ともかくだ。私は上白沢慧音。君は？」

呉爾羅「…蒲田s」



「ちよおつと待った！」

呉爾羅「……。」イラッ

チルノ「おまえ強そーだな！天才の私と勝負しようぜ！まあ勝てないだろうがな！」

大妖精「……。」あたふた

呉爾羅「…慧音と言ったな。覚えておこう。…俺は蒲田進。この青いやつ借りてもいいか？」

慧音「あ、ああ…構わないが…。」

呉爾羅「…よし、こっちに來い青いの。」

チルノ「私はチルノって名前があるんだぞ！知らないのか!?!」

呉爾羅（…知るかよ青いの）

くどつか広いところく

大妖精 「えつと…勝負は弾幕バトルで、弾幕以外の攻撃は禁止です。どちらかが倒れるまでの勝負です。」

呉爾羅 「弾幕以外…『打つ』のがダメなら『撃つ』…か。」

大妖精 「…はじめ！」

チルノ 「私からいくよお！氷符『アイシクルフォール』！」 シュババババ

呉爾羅 「側面がガラ空きだ。そんなんじやすぐにやられるぞ。」回避

チルノ 「な、なんだとおお!?!」

呉爾羅 (打つのが駄目なら撃つ。核散『戻ることなき靈魂』) シュココオオオ…

チルノ 「な、なんだ?ちつとも痛くないじゃんか!はっはっは!くらえアイシクル  
フオール!」

呉爾羅 「…。」

チルノ「…あれ？」

呉爾羅「今貴様に撃ち込んだのは『封印弾』だ。すべるかーど？だったか。一定時間封じ込む…。」

チルノ「な、なにいいい!？」

呉爾羅（さて…次はこつちだな。）シユウウウウウ…

チルノ「こ、今度はなんだあ!？」

呉爾羅 「名前を付けるとするなら…、絶界『切り開かれる完全熱線（パーフェクトレイズ）』かな。」 シュゴオオオオオ

その手の平との距離なんとゼロ距離に等しい。魔法の森を炎の海にした火炎を放つた。焼く…いや灰すら残さないであろう。

大妖精 「え、えーと…蒲田さんの勝ち…？でいいのかな。」

呉爾羅 「…。」

チルノ 「う、ううう…」 ぶすぶす

慧音「なんだ!? 今大きい気と炎…が…」

妹紅「なにが…起きている…?」

そこで2人が目にしたのは、フードを取った蒲田進の素顔と、初めて会ったときよりも大きく、伸びている尻尾。紫色に輝いている背中の背鰭と、焦茶色になったチルノ、そして規模は小さいがそれでも立派な火事と言えるであろう現場であった。

妹紅 「お、おまえはまさか…魔法の森を炎の海に包んだ…」

慧音 「なんだって…!？」

呉爾羅 「……ッ」 スツ

『それ』はこちらに手の平を向けてきた。2人には理解できた。『殺意が込められた手』だと。その黒く禍々しい光とオーラを放っているのが、こちらに手を向けた。それは戦鬨の体制だと瞬時に理解し、身構える。



呉爾羅（…あの森を燃やしたときもそうだった。何者かに体が、意識が、全てが乗っ取られているような感覚。おそらくこのままではこの世界全てを焼く。魔法使いが言っていた『博麗の巫女』どころではない。全てを敵に回すが、それでも止まらないだろう。）

ゴジラ 対 フレディ Nightmare Fiction

異色の来訪者、その名はフレディ・クルーガー

ここは幻想郷（恐竜ドラゴンさん側）。

博麗神社に人影が2つ。1人は巫女服を着た女性と、もう1人は赤と緑の横縞セーターを着た男性が境内を掃除している（させられている）。

霊夢 「ちゃんと掃除しなさいよフレディ。お昼ご飯抜きにするわよ。」

フレディ 「おまえ、その言葉は毎朝聞いてるから聞き飽きたんだが。」

霊夢 「誰かさんのせいで毎日言わなきゃいけなくなつたのよ。自覚ないの？」

フレディ「うっ…」

霊夢「ところで…さつきから何をコソコソしているの？紫。」

紫「あら、バレちゃったかしら？」

霊夢「バレるものにも、そんな分かりやすいところでスキマから見たら誰でも分かるわよ。」

紫「まあその話は置いておいて…実は2人にとっておきの話があるの。」

フレディ「なんだい？手短かに話してくれよな。」

紫「…とある世界、いや、『別の幻想郷』に行ってもらわ。」

霊夢「どういうこと？この世界以外にも幻想郷があるってこと？」

紫「正確には並行世界かしら。」

フレディ「で、そこに行つてどうすればいいんだ？」

紫「行つてどうかじゃないの。まあ、とある人物に会ってもらおうと思つて。」

フレディ「とある人物？また増えるのか？」

紫 「あなたが『ホラー界のセレブ』なら、その人物は『生物界のキング』かしらね。」

フレディ 「は？何言ってるか全然理解できねえ。」

紫 「今その世界では、とある異変が起ころうとしている。それも含めて行ってもらわ。」

フレディ 「とあるばっかりだな…まあいいか。また俺が有名になるんだからな！」

紫 「それじゃあ2名様、ご案内〜！」 スツ

フレディ 「…ん？2名様？」 ニユウ

霊夢 「え!?なんで足元にスキマが？私行かないわよ？」 ニユウ

紫 「…答えは聞いてない！」 キラツ☆

フレディ 「テメエエエ後で覚えとけえええええ!!!」 ヒューーン…

霊夢 「なんで私までえええええ!?」 ヒューーン…

紫「…さて、『虚構』と呼ばれる存在に、あなた達はとう立ち向かってゆくのかしら。またひとつ、楽しみが増えたわね。」

く幻想郷 蒲田進の世界く

フレディ「あの野郎覚えとけよオ…」ヒューーーン

霊夢「落ち着いてる場合!?!」ヒューーーン

フレディ「おまえ空飛べるじゃん。」

霊夢「あ、そっか。」ふわっ

フレディ「ってヤバ地面地面!？」

霊夢（あの場所……どこかで見たことあるような……あれ？神社？え？）

ドザアツ↑落下音



??? 「なんだぜ!? まさか『アイツ』が来たのか!？」

??? 「とにかく見に行きましょう。」

フレディ 「イツテテテ……って、ンン？」

彼の目に映っていたのは、魔理沙と霊夢。それだけならいつも通りなのだが、後ろにも霊夢、前にも霊夢。

霊夢 「…あれ？」

霊夢 (K) 「え？私が…」

霊夢・(K) 「2人!？」

魔理沙 「えっ…ええ？」

フレディ 「…ところで魔理沙。」

魔理沙 「え？おまえなんで私の名前を知ってるんだぜ？」

フレディ（そうか、この世界は俺が暮らしていた世界とは違う幻想郷。この世界の魔理沙とは初めて会ったってことか…。）

フレディ 「俺はフレディ・クルーガー。ホラー界のセレブだ。よろしくな。」

魔理沙 「私は霧雨魔理沙だ。で、こっちが博麗霊夢…なんだけど、せめて見分けられるようにしてくれるか？」

霊夢（K） 「んなこと言われたって…ねえ？」

霊夢「ウンウン

フレディ「ところでさっき言ってた『アイツ』ってなんなんだ？」

魔理沙「知らないのか？」

フレディ「あー簡単に説明するとだな…」

男説明中

魔理沙「…つまりもう一つの幻想郷から来たってことか。」

霊夢（K）「その人物っていうのは、恐らく今恐らく一番話題になってる人物だと思うわ。（そっちの世界でもやっぱり紫はいるのね）」

霊夢「一番話題になってる人物？」

魔理沙「森を焼き払い、天狗さえも退け、今最も話題になってるやつだ。」

フレディ「俺たちはそいつに会うように言われたんだよ。」

魔理沙「そいつの名前は…『蒲田進』。私のマスターパークを真正面から受けてもキズ一つ付かない。」

フレディ「…そいつをぶっ倒したら有名になれるかねえ？」

魔理沙「なれるだろうな。そもそも倒せるのか？おまえみたいな人間に。」

フレディ「俺はホラー界のセレブ、フレディ様だ。パパッと倒してやるよお！…多

分。  
」

霊夢（K）、霊夢 「多分って何よ。」

フレディ 「まあ任せとけて！」

くその頃 蒲田進く

妹紅「クソツ…なんて強さだ…!?」

慧音「私たちの攻撃を受け続けても平然としていられるなんて…」

呉爾羅「…。」

呉爾羅（…何かが、この世界とは別の『なにか』が、放り込まれた気がする。…こいつら倒してさっさと退くか。）



続

## 外伝でのキャラ設定

シン・ゴジラ（ゴジラ2016）

第2、3形態で蒲田に出現し、その後第4形態で東京都を炎の海にした荒ぶる神の化身、呉爾羅。

蒲田進

転生してからは、黒のパーカーを着てフードを深く被っている。右眼は黒髪で隠れている。さらにフードで隠れているので、その素顔をしっかりと見たものは少ない。

好きなもの：放射能

嫌いなもの：凝固剤

二つ名：絶望の巨災、荒ぶる紅虎、虚構 など

・幻想郷転生後

森林にてルーミアと遭遇、その後魔法の森にて霧雨魔理沙と交戦。熱線にて森を焼け

野原にする。これにより、幻想郷中にその存在が知れ渡ることになる。

彼は自身のことを『虚構』と呼んでいる。

日本にいたときから、弾丸、ミサイルなどによく反応するため、『弾幕ごっこ』では放たれる弾幕のほとんどを避けていたり、無傷で止めていたりする。

日本の名残りなのかどうかは不明だが、凝固剤が苦手。

弾幕、凝固剤のワードやそのものによく反応する。

スペルカード

絶界『切り開かれる完全熱線（パーフェクトレイズ）』

レーザー状と火炎放射状に切り替え可能。レーザーをいすぎると火炎放射に切り替わる。それでも使いすぎると火炎放射すら出なくなる。

最近では背中の背鰭からレーザーを出す様子も見られた。

この熱線には大量の放射能が含まれている。まともに受ければ、その後の被害も大きなものになるだろう。

限血『破滅の兆し』

パーカーのフードを取る。または自然に取れる。尻尾や背鰭が伸び、隠れていた目が見えるようになる。

これはスペルと言つてよいのか分からない。自然現象に近い。

現在未使用スペル

激震『リスタートプログラム』

その対象の魔法効果や状態異常を消去する。

虐符『本能の目覚め』

一定の範囲、または対象に放射能を含んだ霧及び弾幕を出す。

終止『それは侵攻を停止する』

エネルギーを補給するためにその動きを止める。

壊核『終わらない絶望』

対象にダメージまたは被弾するまで追尾し続ける弾幕を大量に発射する。

虚構『荒ぶる神の化身』

それはまさに神の化身。全てを焼き尽くし破壊する。

その名は…ゴジラ。

デストロイア

1995年、羽田空港にてバーニングゴジラと激戦を繰り広げた怪獣。メルトダウン

の影響でパワーアップしたゴジラから空中への逃走を図ったが、超低温レーザーや冷凍メーサーなどの集中攻撃を受け、翼が破壊される。そのまま墜落し死亡。

…するはずだったのだが、死に達する直前に魂が体から抜け出し、幻想郷にたどり着く。

### デロイドア・レイス

今作の本来の主人公。転生後には翼や尻尾、短い角や能力も健在していた。

すでに怪獣態や途中形態の妖獣態も見せている。異変も経験済み。とある日を機に姿を消したらしいが…？

彼は人間ではない。成長、進化することはあっても歳を取ることはないのだ。よって博麗霊夢や霧雨魔理沙らが他界したその後も身を潜めながら生きているという説がある。

そしてその存在は不死身である者や当時の妖怪達によって伝説として語り継がれることとなる。

そしてパラレルワールド（別世界）の幻想郷では、黒いパーカーを着た者が現れた。  
さらに、異色の来訪者が訪れる。

遂に始まる、時空を越えたアルティメットバトル

次回、【黒き衣と赤い爪、地を這うのは勝者のみ】

## 対峙する悪夢と虚構

くフレデイと霊夢く

フレデイ「えーと…今持つてるものは…」ガサゴソ

フレデイが現在所持しているもの

- ・ゲーマドライバー
- ・マイティアクションXガシヤット
- ・食料と思われる何か



フレディ「ドライバーとガシヤットはあるな。でもこれは何だ？食えそうな気もするが…まあ持つておいて損はないか。」

霊夢「フレディ待つて、あそこに誰がいる…。」

フレディ「おん？どした霊夢…つてありやなんだあ？」

2人が見たのは、2人の女性と黒いパーカを着た男。そして燃え盛る炎。女性の片方は傷を負っているようだ。もう片方はその男と戦っている。男はその女

性が繰り出す攻撃を避け続けている。

霊夢 「慧音大丈夫!？」

慧音 「ああ…霊夢か…。私のことはいい。今妹紅と戦っている黒いアイツを止めてくれないか…?」

フレディ 「おい霊夢…あの黒いやつもしかしくなくても…例の『アイツ』なんじゃねえか?」

霊夢 「違ったとしてもやらなきゃいけないことには変わらないわ。」

フレディ「おっしやるかあ!!」グッ  
b

??? 「おいそこのお前。」

フレディ霊夢「…?」

呉爾羅 「そこにいる…焼き爛れたような顔をしたおまえだ…。」

フレディ（俺かよお…。つか焼き爛れたって言ったなこいつ絶対に潰す）

フレディ「で、なんか用かよ。」

呉爾羅「…戦え。…俺と。」

フレディ「名前ぐらい名乗ってほしいものだなあ。俺はフレディ・クルーガー！セレ

ブ界のホラー……じゃなくてホラー界のセレブだ!!」

呉爾羅「……蒲田進。」スツ

フレデイ「オイオイ……いきなり手の平こつち向けんな! w w」

呉爾羅「……五月蠅い。」バシユウン

フレデイ「こいつマジで弾撃ちやがったツ!？」

呉爾羅「…。」

フレディ「おまえ危ねえぞ！いきなり攻撃してくるなんて…。」

呉爾羅「おまえも早く攻めてこい…。」

フレディ「ああそうかい…じゃあやらせてもらおうよ！」ガシヤツ

呉爾羅「…なんだそれは。」

霊夢（フレデイのやつ…いきなり使う気なの？スベルも使わずに…）

フレデイ「見て驚くなよ怪物！」 スチャ

【マイティアクションX！】

呉爾羅（…貴様もほとんど怪物だろ）

フレディ「変身ッ！」

【ガシャット！】

レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム！  
ワツチャネーム!? アイム ア  
カメンライダー！】

フレディ「へっ…どうだ！」でーん！

妹紅・慧音（な、なんかずんぐりむっくりしてる…）



呉爾羅 「…舐めているのか？」

フレディ 「まあ見てろ！大・変・身！」

【ガツチャーン！レベルアップ！】

【マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション！X！】

フレディ「これで文句ねえだろ？さあ、始めようぜ!!」ガシヤコンブレイカー！ジャ・キーン！

呉爾羅「…そのカラクリはそうやって使うのか。」

フレディ「ん？どういふことだ？あたかも持っているみたいに…おまえまさか!？」

呉爾羅「この どらいばー とかいうものをさつき貰ったのだ。…八雲紫とやらに。」

フレデイ・霊夢（またBBAかよ…（紫なのね…））

呉爾羅「使い方は教えてくれたがまだイマイチ分からなかったのだ。感謝する。」ガ  
シャツ

フレデイ「…まあいい。これでお互いライダー同士、正々堂々勝負できるからな！」

呉爾羅（とは言つたもの…）

〈回想／約12時間前〉

紫「…ということ、で貴方にこれをあげちゃうわ。使い方はさっき教えた通り、何かあつたら使つてみて。そのガシヤットも私が特別に作ったのよ？ 貴方にピッタリ！ 私の愛情も込もつてる♪」

呉爾羅「…気持ち悪いから失せろ。」

紫「……うわあん藍ンンン!!」びええええん

呉爾羅（…これはどういうときに使えばいいんだ。…どらいばー。）

く回想終了く

呉爾羅（…だがこれならチカラを暴走させずに済むかもしれないな。）スチャ…

【キング オブ モンスターー！】

フレディ「なんだそのガシヤット…聞いたことねえし見たことねえぞ!!」

呉爾羅「当然だ。八雲紫が作ったらしいからな。俺の為に愛情込めて。」

フレディ・霊夢（うわあ…）

呉爾羅 「たしかこうやるんだったっけな。……変身。」

【ガシヤット！】

レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム!? アイム ア  
カメンライダー！】

見た目はほとんどエグゼイドだが、体に水色のラインが入っており、体色も真つ黒。目も緑色。

フレディ「…とりあえず次はレベルアップだ。…えーとそのピンク色のレバーをこ  
う…開くんだ。ほらさっさとしてくれ。」

呉爾羅「…セリフを言えと言われているから一応言っておく。…第2形態。」ガチア

【ガッチャーン！レベルアップ！】



【デストラクション！弱肉強食！キング オブ モンスター！】

フレディ「うわ…なんだよそのデザイン。似てるけど。」

妹紅「…かつこいい。」キラキラ

慧音・霊夢「…え？」

見た目はやっぱりエグゼイドに似てる。だが主な色は黒。いや、7割黒色で染まってる。残りの2割は赤や紫。

完全にゴジラである（メタい）。

呉爾羅「…変身した後に何か台詞を言えと言われた。一応言っておこう。」

フレディ達 「」「ゴクリ…」「」

呉爾羅 「仮面ライダーダージラ。貴様は喰うか喰われるか…どつちかな…？」

## それぞれのSpeculation

前回までのあらすじ

お互いに睨み合うフレディと蒲田進。

フレディは仮面ライダーエグゼイドに、蒲田は八雲紫からの愛情込もったゲームドラマイバーとガシヤットで、仮面ライダージラへと変身する。

(戦闘シーンは一部大幅にカットします。ご了承ください。)

くエグゼイドVSジラく

フレディ「クソツ、こいつ全然攻撃効かねえじゃねえか!？」つガシヤコンブレイカー

呉爾羅 「…そろそろ使いどきか。」 スツ

【ガシヤコンポインター！】

フレデイ 「…なんじゃそりや？」

呉爾羅 「八雲紫曰く、”放射熱線を模した”らしい。なんのことは知らんが威力は折り紙付きなんだとか。…だからお前で試す。」 ビジュヴヴン

フレデイ 「危ねッ…!？」

ジラの右腕にあるガシヤコンポインターから放たれたレーザー砲は、エグゼイドが避けたその真横を通り過ぎ、そこにあつた木々を一刀両断にした。

フレディ（うつわ…あれを真面に喰らつたら怪我じやすまないな…）

呉爾羅「…今レバーは手前に引かれている。前に押すと変わるらしい。」

フレディ「へえ…。」

呉爾羅「…。」

フレディ「…?」

呉爾羅「…ッ。」【ジュ・ギーン!】

フレディ「無言でやるなよ…」

呉爾羅「…レーザーエネルギーが刃になったか。」カシャ…

【ガシャット!】

【キメワザ!】

フレディ「おいおいおいおい…そんな物騒なもん向けんなよ…!?」

【モンスター クリテイカルフィニッシュ!】

フレディ「クソッ来い!!」 バッ



呉爾羅 「…斬りかかると思っていたらしいな。」 ビジュン！

フレデイ 「ハアツ!? 刀身が飛んできただとオオオオ!?」 チュドーン

呉爾羅 「…。」

フレデイ 「じゃあ…これでどうだ!」

【ゲキトツロボッツ！】

フレディ「大・大・大変身！」

【ガツチャーン！レベルアップ！】

【マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション！X！】

【ア ガツチャ！ぶっ飛ばせ！突撃！ゲキトツパンチ！ゲ・キ・ト・ツ・ロボッツ！】

フレディ「へへッ、これでレベル3だ!!」

呉爾羅「……………」

フレディ「…おめえまさか『2つ入れ口があるのはそういうことなのか』とか思ってたねえだろうな？」

呉爾羅「…！」

フレディ「凶星みたいだな…！させるかよオツ!!」

呉爾羅「…おまえは甘い。」「ジュ・バーン！」

フレディ「ヤベツ!？」

呉爾羅 「…だからおまえは甘いんだ。」 カシヤ

フレディ 「フェイントはズルいぞ…撃つなら撃てよ…。」

【ドラゴナイトハンター Z!】

【ガシヤット! ガツチャーン! レベルアップ!】

【デストラクション！弱肉強食！キング オブ モンスター！】  
【ア ガツチャ！ドツドツドラゴ ナツナナナナーイト！ ドラ！ドラ！ドラゴナーイト  
ハンター！Z！】

フレディ「…ワオ。」

呉爾羅「決着をつけようか…。」

フレディ「…そうだな。」

【ガツシューーン！ ガシャット！  
】

フレディ（これで全てが決まる…！）

紫「ちよおおっと待ったアアアア！」

呉爾羅「…ん？」

フレディ「よそ見してんじやねえぜ!!」  
「キメワザ！」

【ゲキトツ クリテイカルストライク！】

呉爾羅 「何ッ…!？」 チュダアアアン

【ガツシューーン！】

紫 「あら…？もしかしてお邪魔しちゃった？」

呉爾羅 「…あとで灰にしてやる。」

紫 「残念だけどそれは叶わないわ。」

フレディ 「どういうことだ？」 「ガツチョーン！ガツシューーン！」

紫 「ハンターゲーマーの活躍は見られなかったけどそれどころじゃないわ。ちよつとスキマを使いすぎてワープホールが出来ちゃったの。ほらアレ。」



フレディ「…さっきからやけに騒がしいと思ったら、その音だったのか。」

呉爾羅「…で？」

紫「逃げるか死ぬかのどちらかよ。こうやって話している間にもあのワープホールはこちらに迫ってくるわ。急すぎる展開かもしれないけど、早く選びなさい。あのワープホールは時間が経てば経つほど進む速度が加速する。」

呉爾羅「…止める方法、もしくは消す方法は？」

紫「あのワープホールが出現した理由は、貴方がこの世界に来たこと。それが原因と言っても過言ではない。だから貴方が入るか、フレディが入るか、この幻想郷が飲み込まれるか」ゴゴゴゴゴゴ……

フレディ「ってやばいぞ！もうこっちに来てるぞ!？」

呉爾羅「フレディ・クルーガー……」

フレディ「なんだ……ってオイおまえどこに行く気……!？」

呉爾羅 「…受け取れ。」 カチャ…

フレディ 「これは…『ドラゴナイトハンターZ』？」

呉爾羅 「俺がワープホールに入れば…全てが終わるのだろうか？」

フレディ 「おいまさか…でもだからってお前が入る理由がねえだろう。」

呉爾羅「…俺の体が『行け』と言っているのだ。」

フレディ（…すまねえ言いたいことが分からねえ）

呉爾羅「兎にも角にも、貴様らとはここでお別れだ。…これ以上俺の存在を知られたくはないんでな。そいつは置き土産だ。持って帰れ。じゃあな。」

フレディ「お、おいちよつと待つ…」

呉爾羅「…生きる。胸張って生きる。例え顔が焼き爛れていても、中身が怪物でも、堂々と歩けばいい。…少なくとも俺はお前からニンゲンみたいに甘くはない。」

フレデイ「じゃあ…次会うときは夢の中かねえ？」

呉爾羅「会えたら…な。…さらばだ。」  
ジュオオオオオ…

フレデイ「…霊夢。」

霊夢「…何？」

フレディ「突っ込めエエエエエエ!!!」だああああつ！

霊夢「ええええええええツ!？」

慧音・妹紅（なんだったんだ…？）

くフレディ・幻想郷く

フレディ「んっ…？」ぱちっ

フレディ「俺は寝てたのか…。夢でも見てたのか？だがあんなはつきりとした夢があるはずは……ん？」カシヤ…

彼の手の中には、『ガシヤット』。しかもドラゴナイトハンターZ。

フレディ「…二度寝しよ。」



## 夢の終わりと目覚め

「夢の中？」

フレディ「っん……ここは……？」

フレディが目覚めたのは、明らかに博麗神社ではない景色。森林の中である。そこにとある2人がお互いに睨み合っている。

フレディ「っておいおい……あれは確かさつき……蒲田？ ってやつか。おいおまえ——！」スツ

蒲田? 「…。」スウツ…

フレデイ「ファツ…!?!」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ。

俺、フレデイ・クルーガーは二度寝して、おそらく夢の中だとは思いますが、そこにはさっきまで戦っていた蒲田進ともう一人、見覚えのない奴がいた。蒲田に話しかけようとして、そいつの肩を叩こうと思ったら、触れられなかったんだ。

…何を言ってるか分からんだろうな。

フレディ「おい…聞いているのか…！…もしかしたら俺が見えてないのか。夢の中だもんな。」

ゴゴゴゴゴゴゴ…

フレディ「お…い…なんだなんだあ!?!何が始まるんだよ…!?!」

瞬間、その世界が光り輝いたッ！

フレディ「くっ…眩しい！ツルピカのハゲ頭以上に眩しい…！」

その光が消えたその時には、彼の目の前にいた2人の姿は変貌していた。

フレディ「…は？」

蒲田「ギャオオオオオオオン！」

??? 「グギャアアアア…!!」

フレディ（おいおい…こいつらもしかしたらもしかしなくても、さっきまでいたあの2人だろ…!?考えなくても分かるぜ…。）

??? 「完全生命体と虚構の運命を見届けるのだ…ホラー界のセレブよ。」

フレディ「だ、誰だ…!？」

「我が名…『ゴジラ』と言う。それも、第1代目。初代。」

フレディ「…その爺さんが何の用だ。」

初代ゴジラ「紅の甲殻がデストロイア、そして貴殿が先ほどまで戦っていたのが黒い甲殻のほう、ゴジラ。」

フレディ「…あいつもゴジラだったのか。ゴジラは聞いたことがあるが、あんなやついたか？」

初ゴジ「奴は特殊でな。2016年に生まれた新人…と言ったところか。」

フレディ「そうなのか……ってえ？今あんた俺の心を……!？」

初ゴジ「ここは夢の世界。なんでもありじゃ。」 b

フレディ「で、見届けるって、具体的にどうすればいいんだ。」

初ゴジ「言葉そのまま。見届けるのだ。彼らの戦いを、運命を。」

フレディ「んん……。」



初ゴジ「…。」

ギャオオン！　グギイイアア！　ゴゴゴゴゴドドドドドンチユドーーン…

フレディ「おいじじい。」

初ゴジ「じじい言うな。」

フレディ「暇だから帰っていいか？」

初ゴジ「だめじゃ。」

フレディ「ですよね。」

とは言うものの、巨大な怪獣2体が互いにぶつかり合っているのをただ見るだけと言  
うのはなんとも面白くない。怪獣好きなら盛り上がるだろうが、隣にはおじいさん。自  
分含めて2人。これ程盛り上がらない・面白くない鑑賞教室はないだろう。

フレディ「…帰らせて下さいお願いします。」orz

初ゴジ「…土下座されるとは思わなかった。まあ、もういいだろう。…そうだ最後にひとつ。」

フレディ「なんだ。」

初ゴジ「諦めるな、フレディ・クルーガー。貴殿が今、そしてこれからすべきことは、『戦うこと』だ。後ろにいる奴らを護つてやれ。…もう言うことはない。目覚めよ、勇敢なる戦士よ…。」

そして、俺は光に包まれて、気付いた時は神社にいた。

俺はドラゴナイトハンターZを手に入れた。

そのガシヤットは後々役に立ってくれた。

霊夢から聞いたところ、俺がその夢を見ている最中ずっと唸っていたらしい。

二度寝した後はいい。あれは夢だ。

だが、それまでのことは本当に夢だったのだろうか…。